

呵久内笑平著

此是滿天

秋平堂藏版

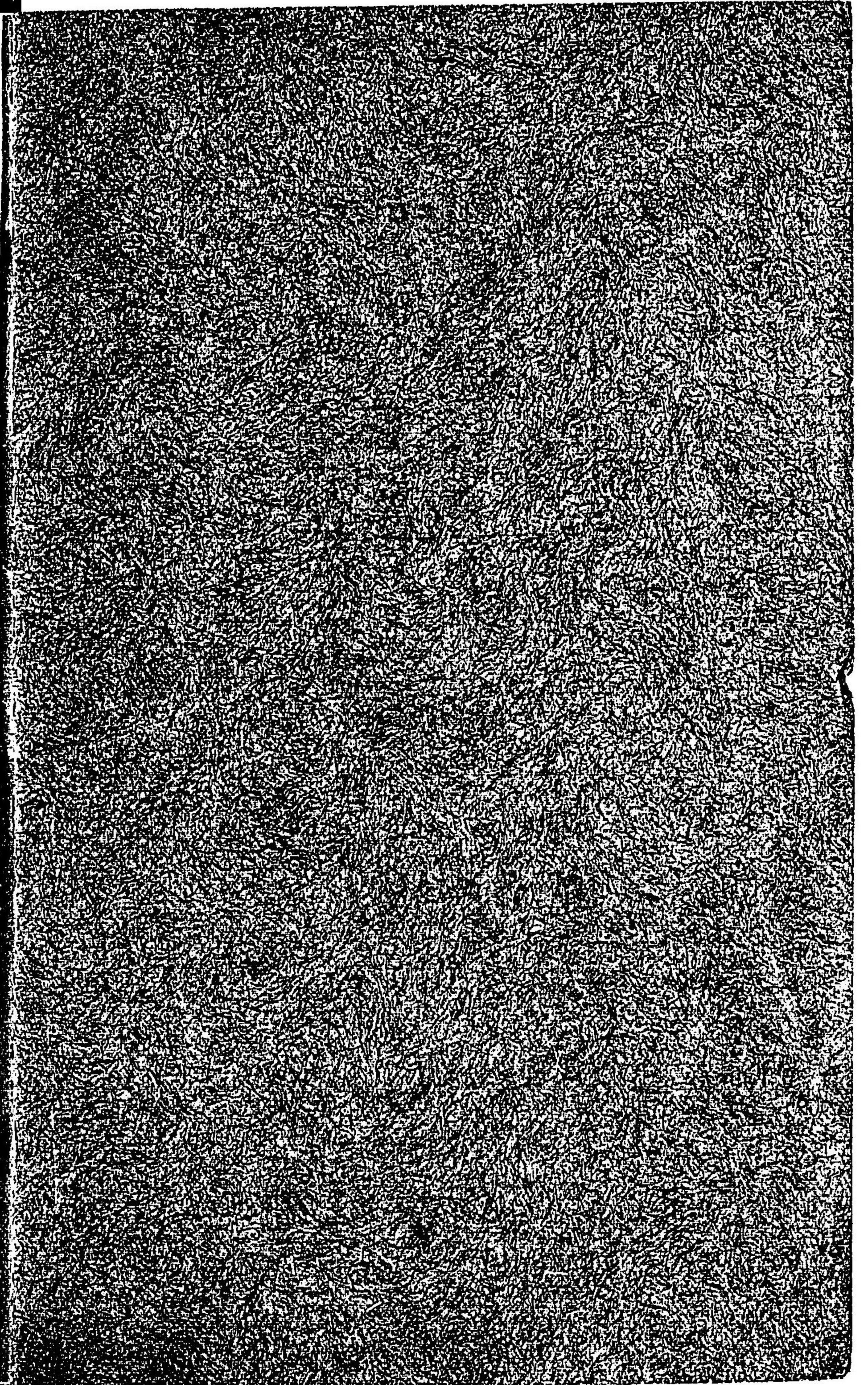
259
893

特13
981



哄
笑
微
笑

附偉人蒞蒞問答



序

よく笑ふは大國民なり、よく怒るは小國民なり、よく泣くは亡國民なり
謹嚴は人の美德なり、左れど謹嚴度を過ぐれば怒り易くなるべし、不幸の涙、同情の涙の流れ出づるは人の天性なり、左れどその度を過ぐれば、泣き人間となるべし、此等を適度に緩和するは、高笑放笑微笑に於てすべし
勤儉は現時の國民是なり、吾人はよく勤儉に

し、而して罪なき資料にてよく笑ひ、以て大國民たる眞面目を發揮すべきなり。余私かに憂ふ吾人よく怒りつゝあらば、或は閻魔大王跳り出で來りて、吾人のド頭に痛棒を加ふるなきやを、又慮ふ吾人よく泣きつゝあらば、極樂淨土又は天國等より、ウナの電報到達するなきやを。諺に言ふ笑ふ門に福來ると、余大に期待す、吾人よく勤儉にしよく笑ひつゝあらば、七福

神諸彦内閣笑議の上、戎三郎君が今宮西の宮等にて鬻がしむる、大判小判取交へ一二億枚をも惠與せらるゝことあるべしこと。讀者諸彦は勤儉にて通貨を蓄積し、本書を閲して哄笑微笑せられ、以て戎古金の到來を翹首せらるゝならば、著者望外の幸甚なり。以て序とす

明治四十二年初冬

呵久内笑平識

解説小言

一本書の笑話は著者の全く作爲したる虚談にあらず、實際ありたる
實事談に著者多少の潤色を加へたるものあり、左れば本書は滑稽
にあらしめて、ユーモアと言ふを至當とすべし

一本書は事實ありたる地方の、土音を混入しあれば、讀者之を容認
せられよ

一偉人蕩弱問答は西洋の分のみにて、東洋のもの欠けたるも、是は
次輯に於て掲出すべし、その心せられよ

一蒞弱問答の本体は、問答の句面に關聯を保たしむるは、正式をれ
ども本書のは偉人の事蹟功業を、簡單に讀者をして忍ばしむる、
著者の存心あれば、問答に聯掲せる偉人の、位置境遇功業等百般
につき、相對せる偉人に伏在の關聯を、保たしめあるあり、讀者こ

二

の關聯を想起して、偉人の事蹟を忍ばるべし
 一本書は突差に書き流し、突差に印行したるものあれば、誤字脱字
 當て字あきを保せず、讀者諸彦之を諒とせられよ
 一讀者諸彦、笑話又は偉人蒞蒞問答の、御腹案あらば、和泉佐野秋
 平堂へ續々投稿せられよ

著者謹識

目録

○鏡に下駄	一	○忠左の子じや	三六
○後見人	六	○嘉平に太平	四〇
○いきり玉	八	○ペコペコ	四一
○屁煎る	一〇	○坊ンチ	四八
○頭の足がた	一四	○狐だまし	五三
○裏向の英雄	一六	○面白い男だナ	六三
○ヤツ是は且那樣	一七	○鮎の子	七一
○翠丸二十八貫目	二一	○火が消へた	七三
○交へたら男	二四	○乃公のことだ	七四
○晝の鴨返せ	三〇	○蛸のだしがら	七八
○いほはにほへほ	三四	○雷買ひ	八四
		○いびつの顔	九四
		○牛より大きい翠丸	九八

- 負けとけく 一〇四
- 兒は泣ひて 一〇七
- お前かく 一一四
- チユーくく 一二七
- 無効の儉約 一二四
- 阿保寅 一三一
- 御苦勞じやのー 一三六
- 神様から手附金 一三九
- 其丈は今日に 一四三
- へ上ま下 一四七
- 糞の穴 一四九
- 家は借りものだ 一五四
- 是はけしからん 一七〇
- どおらあー 一七七
- 三月菜の根 一八三
- 屁競べ 一八八
- 八十八ヶ所 一九五
- 手の平から屁 二〇〇
- 黒大のげひ 二一一
- 山吹色 二一六
- へはこや 二二九
- 錢筒大夫 二三三
- 馬糞團子 二四八
- 警官に足 二六一
- 千一 二八二
- ヤレナイアーエ 三二二

鏡に下駄

大蛇作と言ふは大食大飲する男あり、友達三四と矢張友達の吃常の家
 家に招待せられぬ、最初は三種の下物にて酒出でたり、大蛇作ホク
 ホクものにて

作「常サン大變を御馳走だ子、ドウモ極樂に行つたつて、コンナ良
 いことはあいただろうと思ふ子、ホント酒と下物の芬丈でも、臆
 は落ちる心持がする子

常「イヤ君達の處へ招待れると、何時も御馳走だが僕の方は一向こ
 れと云ふものもあいが、不味んだが澤山準備してあるから、澤
 山飲食て呉れ給へ

作「イヤモ其澤山てー奴は一番の御馳走だハハハハ
 杯めぐり初めて漸々宴酣にあり行くに、作公大蛇の正体を現はす如

作「へへへ吸物のおかわりが出来すか子
常「ナンボでもおかわりして下さい」

作「ソレでは濟みまんせが十四五杯おかわりして下さい、へへへ
僕は内氣ナ性質だから、ツイ口に憚かつてへへへ、、、
かくて代へては吸ひ、又又代へては吸ひ、給仕人は作ドンに附切り
ありけり

應て御飯も出でぬ、作州又幾杯かを喫し、水にかしたる達摩大師の
如くに座し、友人を願て

作「君方、僕に觸はつてはいけぞ、注意して呉れ給へ子
友「何故」

作「僕は大變御馳走になつたんだから、君方の手でも何でも僕の身
体に觸はろうから、御馳走は吐るからナハハハハ、、、
かくて宴撤せられ、家路に就かむとするあたり、作公体を動らぬ様

、静かに立ち上がり、腰を据へまわしつゝ徐歩して、上り櫃の處に
至り、そこに佇立みて

作「常サンお氣の毒だが、鏡を貸して下さい」

常「ソナ處で鏡をドウするんです

作「一寸下駄をうつし見るんです

吃常鏡とり出し、大蛇作に與へければ、作公之を額頭にさしかざし
、鏡面を庭に向け、自分は仰向き鏡を覗き、探海燈にて探り見るが
如く、左右前後に鏡面を動り傾け、自己の下駄を漸くさぐりうつし
得、静かに庭に下りて之を穿き、鏡を傍へに立ち居たる常サンに返
戻し

作「コウしかくては、折角の御馳走は吐ますからナハハハハ、、、
イヤ今日は大變御馳走様でした

挨拶するに腰も屈めず、陶器の關取の歩むが如くに、徐に去りぬ

鍋を賣る行商人でもあいに

ナポレオン一世(銅賣り音一聲)とはこれ如何に

ちんばの鳥屋でもあいに

グイクトリヤ(跛鳥屋)と言ふが如し

後見人

チユーチユー吉は助平の弟助丹と冷かされつゝある男あり、その親族チヨン熊死亡し相續人小チヨン熊幼者ありければ、順當なればとて助丹殿この家を後見しけり、後家殿おたらと言ふは、まだ姥櫻か婆櫻かの殘んの色香、一枝の手折黙止がたき風姿あり、チユーチユー吉より挑みけらしか、後家サンお膳を据へけるか、又全く紋も形もあきことか、そんじよ其處の事實は、突留めて見る閑人もあけ

れば、知る由もあけれど、兎に角後見後家の間に一種常ならぬ關係ありて、おたら吉六の噂は、七十五日の以上人の口の端にかゝれり

チユーチユー吉の父は、子に似ざる嚴格ある人にて、おたら吉六の噂を耳にし、いとも苦々しきことに思ひ、ある日吉六に向ひ

父「吉六後見と言ふ文字は、平たく讀めばドウ言ふか

吉六けんか面持にて、父の顔を盗み目に見、答へあし

父は稍々手厳しく

父「吉六ドウ言ふのんか

吉六尙ほもちもちしながら、小聲に

吉「ハイうしろを見ると申すんです

父は極めて嚴重ある口調にて

父「フーム、さすれば吉六、お前も後見人だから、うしろ計見て居

らねばイケナイぞ！

吉六顔を赤くし

言「ハイ、イヤ屹度心得ます

傍人その何の故たるを知らず

臍は互ひ違ひにあつて居るであいに

ヘスチング(臍ちんぐ)とはこれ如何に

屁を喰つても居らあいに

クライヴ喰ひぶーと言ふが如し

いきり玉

ある口悪る男、徳きわめて高く、至極眞面目ある基督教の田舎傳道

師許至り

男「先生基督と言ふお方は、お父さんがあいなだそつてすつてチー

師「ソウデス處女マリヤは、救世主のおツ母サンです

男「ハハアーそうですか、昔からいきり玉が解化らんと申しますが

、救世主はそのいきり玉の、解化つたのだと言ふことにあるん

ですナー、ハハア中々の奇蹟ですナー、ハハア中々珍しいこと

ですナー、ハハア

とて頻に感嘆の体を示しければ、傳道先生いきり玉の何物たるやを
解せざるも、贅語あるべしと逮了し

「ソウです、そのいき玉のかやつたのです、大變な奇蹟です、ア

ーメン

口悪る男、横を向き舌ペロリ

灘の銘酒のテツテルでもあいに

ビス・マーク(美酒マーク)とはこれ如何に

誰も何もやろうと言つて居らぬに

モルトケ(費ふうとけ)と言ふが如し

屁煎る

北京呂吉と言ふはありけり、春篋老許至り

北「先生私しは此間西口の作平の娘おひよろと駈落しましたんで
春「サアそうであつたとナ

北「處であなた、おひよろは村外れ十町ばかりの處で、自家が急に
こいしかつたつて早や歸ると言ひ張るのんで御わす、色々説き
すゝめても承知しませんので、私が男子の一旦出て直ぐ歸るも

馬鹿臭で、其處でおひよろと別れ大阪まで行たので御わすが、十二
三日あちこちぶらついた揚句、仕方なしに又歸つて來ました

春「フムフム
北「處があなた村の連中が何處へ行て來たか〜と、冷やかし半分
で聞きますで、近ひ大阪位へ行つて來たと言ふも、如何と思ひ
まして糞ッ腹も煮へますで、東京へ行つて來たと言ふてやりま
した

春「フムフム
北「スルトそれは豪氣じや、東京の話は面白いじやろう聞かせろ、
江戸ッ語を使つて見いと申しますで、へ入つたへ入つたと言ふ
て遣つたので御わす

春「何處へへ入つたと言ふたのかい
北「何處へと言ふことなしに唯へ入つたへ入つたと計、言ふたので

御わす

春「ソレハ奇妙じやないか、唯へ入つたとはばかりでは一向分らん
北「ナニあまた大阪の宿屋で、私の隣室に東京の職人らしい者が二
人止宿つて居て、何か知らぬが頻にへ入つた〜と、言ふて居
ましたでソレを真似て言ふて見たので御わす

春「フムフム

北「スルト皆がへ入つたとはドウするのかと尋ねまするで、仕て見
せぬと押が利かと思ひまして、へ入を見せるには焙祿が入ると
透思ひ付きで言ひましから、皆が三錢で土焙祿を一ツ買ふて來
たで御わす、其處で尻を煎つて見せて遣ふと思ひまして。その
焙祿を地邊へ置いて、臀をクルリとまくつて大股に焙祿を跨げ
てウント一生懸命に氣張つたで御わす、處があまた尻が出ずに
糞が一切パツト出て、焙祿の中には入つたので御わす

春「ドウモ、ヒドイことをする男じやナ-

北「スルト皆が此がへ入つたと言ふことか、ドウモ穢いことする男
だ、ナンボ東京でも焙祿へ糞するて言ふことあるか、君は皆を
馬鹿にしてる、その糞を君が耐れ承知せぬと口々にわめいて困
りましたが、トウドウ能びて了見して貰ふたので御わすが、隨
分照れ糞ふ御わした

春「ナニ、ソレハ糞が焙祿へへ入つたのじや

不倒翁でもあいに

コロンパス(轉んばす)とはこれ如何に
喋へりのお醫者でもあいに

イサベラ(醫者喋ら)と言ふが如し

頭の足がた

春篋老は俳諧を好みける人あり、草ぶかき田舎にては吟友もなければ、村の若者の心利きたるもの五六人を自家に集め、俳道の概略を説き聞かせ、時々同吟會を催し詠吟するを、こよなき樂みとせり、初雪ふりけるとき、例の會を開き初雪を題としけるに、初めて入會しける二十一二の若者、長時間苦考の後

若『先生、十七字に限らずすこし字數がふへても宜いのんですか
春『ソウじや、字餘りと申してすこし文字がふへても問がない、本

歌にでも字餘りが随分あるじや、古今集と言ふ歌集には一句に一字づゝ五句にて五字も字餘りの歌があるのじや、發句では猶更のこと、調を失はざれば字餘りも又妙じや

得々として説き聞かしぬ、しばらくして皆吟を終へ發表しけり

若者甲 初雪や家々の屋根は眞白け

春『ハハア結構々々能く出來てる

若者乙 初雪や下駄の足形二ニダ四

春『イヤ是れも出來が宜しい

若者丙 初雪や醬油賣が倒れて大根おろしかか

春『フォーム成程

若者丁 初雪や鹽屋荷をかやして彼方あめ此方あめ

春『フォーム大分字餘りが多い様子じや

最後にさきに字餘りを尋ねける若者

初雪や大きを坊さんと小さい坊さんと一所に倒れて
頭の足がた瓢たんかか

春『フォーム、あんぼ字餘かまいあしと言ふてもこれは四十六文字ある、モ一五字あれば發句三ツの字數じや、これでは發句にあら

ぬ哩

かの若者ぬかぬ良にて

若「先生、ソレハ他の人の發句十七字言ふのと、同時間で言ふて終ふ位に早口に言ふ積りで作つてあるのです

木賃宿式の夜具もつかつて居るいに

グラッドストーン(ぐれ宿蒲團)とはこれ如何に
大きい狐は寝て居るでもあいに

オーコンナル(大コン)(狐)(寝る)と言ふが如し

裏向の英雄

甲「君は平生英雄とか豪傑とか言ふことを、頻に八ヶ間敷言つて居る

が、吾輩もソレには多少推服する點もあきにあらずだが、高尚を議論するに拘らず、屁とか尻だとか汚い話を、臆面もなくやらかすには困るであいか、餘り人間もよくあいかから、アレ丈はよし給へ

乙「ナニ君などは氣の毒ながら、英雄とか豪傑とかを、書籍の上で見てる計で、唯漠然とエライ人だと思つて居るばかりで、英雄の英雄たる所以、豪傑の豪傑たる真相を知らぬから困る、豪傑の英雄の肺腑を握み出して、能く解剖したからばだ、屁と尻と糞と小便、皆裏向き計りて固めて居るのだ

甲「又汚いことを、ドゥも困るソレ丈はよし給へ、各大家の解釋は多少見解の異なつた点もあるが、しかし英雄が意思の鞏固なものだとか、果斷なものだとか、用意周到なものだとか、衆人を籠蓋する膽略あるものだとか、大抵相場が決つて居るであいか

彼のカーライルも英雄は至誠を以て一貫して居ると、崇拜論で言つてゐるでかいか

乙「皆嘘だ、裏向を解するを以て英雄豪傑の本領とするのだ、是れは吾輩の卓見なる處だ、英雄あるものは世間一般言ふ色を好むばかりでない、先づ人と約束しても、假に外交上でもた、自分に勝手が悪くあつたときは、屁を食はすのだ、借金あどで首の廻らぬ様を時は小便かけとくだ、腹の立つたときはあどはド奴にでも糞を喰はすんだ、世間は余りゴテゴテうるさくあつた時は、平手でパチパチ尻を叩きつゝ逃るんだ

甲「ソレデモ人傑とも言ふ位の人には、皆泰然自若として喜怒哀色に顯れずじやないか

乙「ソレハ表向、吾輩の言ふのは裏向だ

門に犬を張番させても居らぬに

モンロウ(門ろう(犬))とはこれ如何に

栗食たおちらを喰がすとも言はぬに

クリブランド(栗尻いらんど)と言ふが如し

ヤッ 是 ば 且 那 様

ある村に五郎喜ある馬喰ありけり、素敵ある腕白爺なり、毎朝必ず街路に沿へる自家の雪隠に上り、その窓より通行人を一々誰何し、『五郎喜さんお早よう』と挨拶せしむ、挨拶せずして過ぎ行く人あるときは、五郎喜雪隠より飛び出で、誰れ彼れの差別なく引止め、グズグズ小言を並べ通過せしめざる故村人うるさきことに思ひ、そこを通過するときは、五郎喜の雪隠内に在不在に拘らす、『五郎喜

さんお早ようさま』とて、雪隠に挨拶する習ひとなりぬ、時の村長某氏は、恩威屏び行はれ盛名村内に溢れける人ありけるが、ある朝五郎喜の家の前面を過りけるに、五郎喜雪隠の中より

五『誰だ

村』……………

五『誰だ、誰だ

村』……………

五郎喜大喝

五『誰だい、五郎喜さんに挨拶せずに通るは、一体ド奴だい！

村長殿静かに雪隠の扉の側にまわり、五郎喜のぬぎ捨てある下駄をさちんと揃へ、扉を開きてイト丁重に腰を屈め

村『五郎喜さん村長で御わす、お早よう様

五郎喜、灰毛けでん、糞尻のままにて雪隠より飛び出で、地邊には

いつくばい

五『ヤツ是れは旦那様でしたか、ヤツお早よう様、トンダ鹿相を村人復五郎喜の雪隠に挨拶するを用ひす

愚弄の數々せられたと言ふであいに

ナボレオン三世(愚弄もん)にさんせとはこれ如何に

雁金がしやべくると言ふ譯であいに

ガンベツタ(雁べつた)と言ふが如し

翠丸廿八貫目

雀忠太は骨脱ある男なり、例の春篋老許至り

雀『先生、大金玉の一番大きいのは何百貫位あるんです、大金玉の

世界統計と言ふ様なものはないのんですか

春「サレバそんな統計を作つてる閑人があるかも知れないが、乃公はまだ知らぬ、最大のはドレ位のはあるかナ」

雀「外國のことは私しも知らないのんですが、日本第一の大擧丸は山形縣にあると言ふことです

春「フーム

雀「目方は二十八貫二百三十匁あると言つてますが、随分大したものですナ」

春「細ひところ迄目取してあるが、ドウして秤量たのかナ」

雀「ナニ擧丸丈、番へ入れて秤量てその上番の目方を差引いたのんですと、まだ根元の處は身体の方へ少々負けてあるのだと言つてました

春「秤量が兎も角として、ソレデハ歩くに困るだらう

雀「全く歩けませんそうです、擧丸を抱へてる狸の繪の様に、兩足を擧丸の兩脇へ沿へて投げ出しにした儘、座わつて暮して居るのですて、

春「ソレハそうであらう

雀「此人は二十五六と廿三とかの息子があるそうですが、一番の樂みは此二人の息子に擧丸を擔いで貰つて、歩くこととす

春「尤もあことだ

雀「二人の息子は擧丸を大番へ入れて、差し持ちでエツサエツサつて汗水になつて、擔ぎ行く後から親父が腰を少し前方へ突き出して、足をワニワニさせて、徐々歩いて行くのです、デその時親父の口癖にあつてる言ひ草が、一寸可笑いじやありませんか

春「ドウ言ふのかナ」

雀「伴、苦しければ休むでもよいが、下ろすときブチ付てはあらぬ

いたのだから、君の言ふ通り五十圓出すことに決意だから、交換かい

久「イヤモそうして呉るれば、又次にも交換か換へることにして、目出度手を拍ふ！

五郎喜も喜び兩人、ヨイヨイヨイ、パチパチパチ

五郎喜金を拂ひ、互に笑ひ話もし、牛自慢もしつゝ受渡終へ、久作新來の愛牛を厩に入れ、餌をど與へて撫育措かず、五郎喜親牛を引き歸らむとするに當り

五「併し久作、念の爲めに言つて置くが、交換かへた上は男じやぞ

久「ナニ己も男だ交換かた上はかれこれ言わない

五「ナニ君も男だが交換かた上は眞まに男じやぞ

久「サ男承知じや

五「愈男承知か

久「愈男承知じや、君もクドイナ！

五「男承知ならそれで此方こ方は結構だ、久作明日も好いお天氣らしいナ！、左様から

門邊かに出で、舌ペロリ

久作、好牛の手に入れるに雀躍こし、その夜子息の廿二三あると、交々牛自慢をなし、交々飼育の方法をど話し合ひて、夢路に入りぬ翌朝子息殊の外早起し、愛牛を見て樂まむとて、厩うに就き之を見るに積こは腹の眞中まより水を放下し居れり、子息仰天むすこ、頓狂聲とんきやうにて子「ヒヤ！、親父さんひどいことだ、自家の牛が腹部はらに穴あなが明いた

久作喫驚、臥床ふしより跳ね起き急ぎ行き見るに、果して水を放下し居れり、少時にして放水止みけるに、その終の垂れ模様は放尿の終りの如くありければ、兩人不審の眉まゆを擦ひめ引き出して、よく見るに牡

牛の子にて、腹部なる生殖器の長毛は奇麗に刈取り、睪丸は細き黒糸にて尾の生へ際に釣り上げあり。これ五郎喜の悪計にて、晝間絶好なる牝犢を示し、暮夜に乗じて牡犢の特徴を巧に覆ひ、久作を欺きたるあり、牡犢は牝犢に比し著しく低價なるを以てあり
久作齒嚙し直に五郎喜を喚び寄せけるに、五郎喜ぬからぬ顔にて
五「ナニか用事あるのんか
久作怒りの聲振り立て

久「用も糞もあるかい、うぬは太ひ奴だ、この犢を見ろこれは但馬の七味かい、この詐偽師め、七味ものを早く渡せ！

五郎喜平然

五「七味ものは晝間引いて来た分だ、暮方のは牡牛の兒だ

久「牡牛の兒を誰が所望したか

五「所望もしなかつたが、入らぬと言はあかつたであいか、其交換

た上は男承知じやあいか、牡牛の兒は男じや

久「牝牛であればかれ是れ言はないが、牡牛では筈か違ふ

五「男愈承知じやあいか

久「フム

五「男愈承知ならば、牡牛で申分あるまい

久「フム

五「男愈承知あらば、論はあいか答だ、左様あら

給仕女でもあいに

チ「姐とはこれ如何に

月見の夜ばかり出て来と言ふでないに

ミ「ポー「見りや望と言ふが如し

晝の鴨返せ

金八とて極めて膽細き男ありけり。田甫にて野良仕事しけるに、狐が鴨を囓へ附近を駈り行くを見、この狐を追ひ回はし鴨を奪ひ取り歸家しけり。村の若者等之れを耳にし、怖がりの金八の手より、かの鴨を更に奪ひ之れを下物として一盞會飲せむと企て、其夜稍々更け過ぎける頃、四五人打連れ金八が家の門邊に至り、屋内の様子を窺ふに、夫婦暮しの金八小聲にて、妻と頻りに心配らしき話する様子あり、若者等尙ほ耳を澄ましよく聞くに、妻の聲にて

妻「ソレデモ狐がひどく仇すると言ひますから、ドウモ怖くつておらぬ

稍願へる氣合する金八の聲にて

金「ナニ怖いことはあるか、今時狐が化けると言ふことはあるもの

か、

附元氣せるも矢張怖氣立ち居る氣合なり、又妻の聲にて

妻「明日料理して食べる氣かは知らぬが、わたしは心持が悪いか
らアンナものは見るもイヤです

又金八の聲にて

金「お前が見るもイヤナものを、乃公だつて心持よく食べないし、
困つたナ」

妻の聲にて

妻「ホント今日晝の中返やして遣ればよかつたんです、今頃はあの狐はあなをヒドク恨むで居ると思ふと、わたしは氣味が悪くつてたまりません

金八ブルブルと顫へた様子にて

金「ソナナ氣味の悪ること言ふものであい

妻「ソレ御覽あなただも良い心地がせぬでしやう、今にでも返して
ヤツたあらば安心して寝まれるのんだけれど、ホント心配でな
らあい

門口ある若者、表戸を拳固にてコッコツと叩き、鼻聲の作り聲して

若「晝の鴨返せ！

夫婦共ブルブルとせし様子にて、妻の聲

妻「ソレ早く返してお遣りあさい

金「フーム……………」

考込み居る氣合なり

若者又コッコツと叩き同じく鼻聲にて

若「晝の鴨返せ！

少時は森として聲なし、又妻の小言さ

妻「早く返してお遣りあさいナ！

金「フーム

若者すこしく嚴しくコッコツ叩き、少しく怒調を鼻聲に交へ

若「晝の鴨返せ！

中には妻の聲調少しくはげしく

妻「返してお遣りなさいと言ふに！

金「フーム

とて金八鴨を手にして内庭に下りたる氣合しける故、若者等さし足
にて横道に潜みぬ、金八表戸を細目に開け、「ソレ」とて鴨を屋外
に投げ出し、又戸を嚴しく締切りぬ

若者等また現れ來り、鴨を拾ひ取り、尙聞耳しけるに妻の聲にて

妻「ア、是れで寝られます

金「フーム

若者また例の鼻聲にて

若「金八安心せいモウ恨みがあいから
と鴨を携へ皆馳せ去りぬ

姉を女郎に賣るでもあいに

歴山弗アレキサンダール姉貴三弗とはこれ如何に

勢よく小便を放して居らぬに

シーザー(小便ジャー)と言ふが如し

いほはにはほへほ

ある寺の老僧、手習子屋の師匠しけるがありたりけり、若きとき
不行跡にやありけん鼻欠けありて、たちつてとどらりるるの音は
、鼻にかゝりて満足に發音出來ざりければ、子供等にいろはを教へ
けるに

和「いほはにはほへほ

と發音するあり、おんせ頑是あき多數の小兒、一齊さいに鼻聲にて

一回「いほはにはほへほ

と呼ばはりければ、和尚一方ならず立腹し

和「わしは鼻が悪るい故、いほはにはほへほとしか言へぬが、ホント

は、いほはにはほへほしじや

一層語尾に鼻聲をつよめければ、小兒等又

一回「いほはにはほへほ

と鼻聲にて語尾を著しるく強めける、和尚ますく立腹

和「それではイカヌと言ふに、いほはにはほへほ

一回「いほはにはほへほ

和尚ブンブンものにて半泣聲

和「いほはにはほへほ

一回「いほはにはほへほ

又半泣き聲あり、和尚頭に湯氣たて、子供等目パチパチ、斯くて果てしおかりける
この子供等成人の後も、皆かさかき聲の音調にて、詞つかいしける
とぞ

達摩さんの犬でもかいに

ダルイン(達犬)とはこれ如何に

仁王さんの太鼓でもかいのに

ニエートン(仁王トン(小太鼓音))と言ふが如し

忠左の子じや

田舎にては氏神の祭禮に、にわか狂言と稱へ村芝居を催すこと往々

あるあり、その組立ては村の子供七八ツより十二三までのもの、七八人乃至十人、その時撰定したる藝題の必要數によりて、狂言一座とあし、旅役者の心利きたるもの一人、振付として聘ひ來り、太功記とか忠臣藏とかその他何々の中一段のみ演ずるあり、祭日前三十日計演習す、太夫も素人太夫、三味線も素人にて、稽古中は若者頭之を宰領するなり

祭日至れば役者受持役に相當したる服装、縮緬羽二重金縹綾緞子、綺羅美やかにして目を眩するものを着用し、自村はもとより近郷近在までも前後四五日演じまわるあり、舞臺は平床几にて三疊敷位に組立て、擔ぎ檀尻の階下を樂屋としその階上を太夫座とす、振付先生は舞臺の背後にて陰拍子木を打つあり、演所をかふる毎に是等全部を村の若者等は擔ぎ行く、小供役者は道中駕籠に乗るあり、暫時の稽古あるに拘らず、中には驚くべき巧者あるものも出づるを

身体かみだに飯粒いひつぶの様ような疣いぼが深山みやまないに

イヴセン(飯疣千)とはこれ如何いかに
借金かきして幽霊ゆうらいの様ように消きへるでかいに

カルデロン(借るどろん)と言いふが如ごとし

嘉平かへいに太平たいへい

ある村むらに嘉平かへいとか太平たいへいとか小平せうへいとか松平しょうへいとか又平またへいとか與平よへいとか、平へいの字あざのつく名前なまえ多くありければ、ある閑ひままじん人ひとこれ等の名前なまえを集あつめ

こいでこいでと待つ夜よは来きいで

またぬ夜よは来きてかどに立たつ

と言いふその地方ちほうによく謠うたひうたからうたされたる、俗曲うたにつくりかへ

小平せうへいで久平きゅうへいでと松平しょうへいは九平くへいで

又平またへい與平よへい喜平きへい、嘉平かへいに太平たいへい

雷かみなりの太鼓たいこでもあいに

ゴルドン(ごろどん)とはこれ如何いかに

福ふくは寝ねて待まちてと言いふなるに

チルソン(寝る損)と言いふが如ごとし

へ
こ
へ
こ

ある村むらの清吾せいごと言いふは、野良のらに出いて綿摘わたつみしけり、その日ひは空合そらあ甚おだ
あしく懸かかて一雨いちう降ふり来きるべき模様ようようあり、雪ゆきの如ごとく芽かきかける綿わた、雨あめに
逢あふあらば品質ひんしつをそここかかふべきを憂うれひつゝ、手早てはややに取とり居いたりけ
る折柄せがら午後一時頃ごごいちじころ、ボテ徳とくとて近ちかき町まちの屑屋くずや、その田いの側わきある小路こうじ

を通過し

徳『清吾サン御精が出ますナ』

清『ヤー徳サン今日は、儲かりますかナ』

徳『イヤ一向です、何か賣つて戴くものはありませんか』

このボテ徳と言ふは村落廻りの屑屋にて、農家の下男下女、息子娘子細君等の、私しせる物品を買取るを重なる商賣とし、近慾の勝ける男あり

清『わしがコウ落日和じやで、忙いが君のは商内すればよいのだが』

ら、マー一ツぶく吸付けあさい、商内は牛の涎て言ふであいか』

徳『ヤー難有う、ダガ今日はまだ一向商内してあいかから、行て來ます』

清吾空合を見るに倍々悪し、一思案宜ろしくの体にて

清『しかし徳サン、わしの方に一寸風がわりの者があるのだが、君

買はないかナ』

徳『ドンナものかい』

清『コウ立ちながらでは、商内も出来ぬでないか、マーマー一ツぶく付けあさい』

ボテ徳荷を路傍に下ろし、畦に腰打かけてマツチを取り出す、清吾田の中に立ちあがら

清『今言ふた風がわりのものとは、薄い金で黄を色してるのだ、形はコウ言ふ風にあつてるのんだ』

両手の指先にて小判形を造りて、ボテ徳に突きつける様に之を示し清『ソウシテ、両端をつまむでコウ振つて見るとナ』

又両手の指先にてその或る物体を掴み、互ひ違ひに早くひねり振る真似手ぶりして

清『ペコペコ、ペコペコ、と音がするのんだ、奇妙じやあいか』

ボテ徳「ハハーン、これは小判だナ」早く察したるも、色にも出さず、態と首を一寸かたむけ

徳「ハハア、それは奇妙なものだ、是れから同道から賣つて貰ふ、見た上で直段も思ひ切り張り込むから

清「自家に不用ぬものだ、少々直が安くでも賣ることは賣るが一寸空合を仰ぎ眺め

清「コウ落日和では、今にも雨にでもあつたから、此綿を臺あしにするから、わしは歸家るわけに行かぬ、又今度來た時に買つても貰ふ

とて又忙わしく綿を摘み初めぬ、

徳「ソナナと言はず、すぐ其處が家でかいか、一寸丈見せて貰ふたから、商内は直ぐ此處へ戻つて、君の仕事しをがらするでかいか

清「イヤ中々、この仕事は糸を切る間も放されぬ

今はボテ徳に目も呉れず、手付き甚だせわし、ボテ徳一旦は落膽したりしかども、情々思ふに小判を知らぬ振りに買ふならば、利益甚だ多しコハ半日位仕事の手傳するも悪しからずとて、

徳「サスレバ此仕事すむだから、歸家つて賣るのんですか

清「イヤモ此綿さへ摘み了ふたから、直ぐ歸家つて見て貰ふ

徳「サスレバわしも手傳ふ

とて屑荷の中ある大風呂敷を取り出して、前掛とし田に入りて綿を摘み初めぬ

清「ヤ、君に手傳ふて貰ふは氣の毒だ、ソウして貰はあいでわしが獨りで早く摘むで仕舞ふ

徳「ナニわけのあいことだ

彼れ一ツ是れ二ツ、途切々々に雑談しつつ、額に汗して、摘みけるに

意外に澤山芽きありて、日のトツブリ暮れける頃、漸く摘み終り荷造りしボテ徳屑荷に綿を詰込み荷持助けして、清吾の家に伴ひ行きぬ

清『徳サン今日は大變を助力になつて、ドウもお禮の申し様もあいことだ

徳『ナニあかた毎々、御ひーきにゐるのだから、コレ位の事は當り前です

清『ソウ言ふて呉れると、これから一層ひいきにせねばあらぬとて悠然として、晝の品物を見せむとも言はざりければ

徳『時に、今日の約束の品物はドレですか

清吾今思ひ出したと言へる面持にて、炊事せる妻に向ひ平然

清『オイあの小判出して来て、徳サンに見て貰へ！

ボテ徳ギョツとしながらも、何氣なき体をよそい居けるに、清吾妻

の携へ出でたる小判一枚を、ボテ徳に示し

清『今日話したはこの小判のことだ、直をつけて見て下さい

ボテ徳心に『此小判ならば新聞の物價表では八圓五拾錢だ、直を知つてるのか知ら』と不安に思ひながら、安く買はるれば買はんとて

徳『ナンボならば拂ひあさるんですか、言ふて見て下さい

清『是は外の商人サンは、皆八圓四五十錢からばと、値をつけるのだが、ソレデハ賣れあいが、君のことだから九圓五拾錢にして置かう、目が合ふたから買ふ下さい

徳『ソレデハ逆も追つ付ない

とて口あんぐり、清吾ぬからぬ貞にて

清『イヤそれでは仕方があいが、今日は商内出来ずとも今後一倍最負にすることにしようネー

ボテ徳口の中にて『此上ひいきになつて、たまるものか

後家さんの家へにじり込むでかいに

ソクラテス(そつくら亭主)とはこれ如何に

蟻が酢の入用もないに

アリストートル(蟻、酢問ふとーる)と言ふが如し

坊ンチ

例の雀忠太かの春篋老許至り

雀『先生人と言ふものは、ドウモとんだ失策するものですあー、わ

たしは昨日古今無類の失策を出かしたんです

雀『大袈裟を言ひ方する男だナ、ドンナ失策あんだ

雀『失策も失策、大失策です、マーこうですがな聞いて下さい、あ

の筒菴と言ふ蜂の大擧丸醫者……あなたも御承知でしょう

雀『フムフム、あの醫者の擧丸は大抵を土瓶ぐらいあるそうだナ

雀『ありますとも、中々大したもんです、私はあの筒菴と同じ洗湯

へ行くのんですが、今まで一度も湯で先生に出合つたことがあ

いのんです、ナニ先生が大擧丸を人に見られるが耻かしのんで

しよう、午後二時頃まだ湯が湧くや湧かぬ時分に入つて、人の

は入り初ける頃にはモ一上つて、チャント着物着てるんですか

らナ

雀『フムフム

雀『あの藪君がああ、あれで中々の子悶惱だつてね、あすこの小

供が皆先生が湯に入れるのんですツて、此頃又男の兒が出来た

んだそうで、まだ生れて三十日計しか経たないにああ、はや

先生が湯に連れて行つてますが

春「ハハア！それは感心だわー」

雀「ソコデ私しがあなた、昨日午後友人から招待を受けたのんで、男振おとこ振りを上げて置くと思つて、調度二時頃湯に行つたんです、板間に筍たけのこサンの處の女中が、赤ン坊の着物を廣ひろろげて待つてますで、ハハア！赤ン坊入湯いれかて居るナーと思つて、何氣なにきなく敷しき切きり合あの硝子障子がらす開あけては入いつて行いつたんです

春「フムフム」

雀「シテあな先生よくおこしつて言つたんですが、例の金挺かねてん盤ばんだから私の聲も耳には入いらず、一心不亂いっしんぶらんに赤ン坊を洗つて居いましたんです、丁度あな右の股ももの根ねの處へ、アノ大きき翠丸すいがんを引上げて置おて、赤ン坊の兩足を翠丸のあるべき、自分の股ももぐらに挟くんで、ソシテ赤ン坊の頭あたまをうつ俯おせに左の股ももの上へ載のせて、ソノ脊中せちゆうを痛いたはりく洗いつて遣やつてるのんです

春「フムフム、スルト兩方の股ももの上に、頭あたまの様ようなものが一ツ宛ああると言いふものだしー」

雀「ソコですて、翠丸すいがんが湯ゆの温ぬみで一いパイに、張はり切きつてたんでしようよ、皮かわが延のびて光澤くわさつがある様ようになつて居いつて、ソシテ生うぶ毛けの様ような毛けがまばらに生はへてるんでしようー、

春「クツクツ、フムフム」

雀「私が挨拶しても先生知らなかつたから、私がお愛敬あいぎやうの積つりで、『坊ンチー』てヤサシイ聲こゑで撫なでたなら、ソの撫なでた方が大翠丸だいすいがんであつたんです

春「チヨイウををー」

雀「ホントですか、誰も來きないと思つてゆつたり大翠丸だいすいがんを出だして居いつたんですが、私が手てざわりが餘ありボヤツと柔やわかかつたんでこれほど驚おどびて、手てをすぐ除はずけた拍子しやうしに、先生も驚おどいて赤ン坊を

忠太いとも恐縮の体を作り、

忠「餘義ない急用が御座いまして、是非只今あの村までまいりまなければ……」

警「ナラヌー、其上アスコの村には本日午後、赤痢病が発生してゐるから、尙更以て通過せるチウ譯に行かナイ

忠「ドウモ困りましたナー……併し且那ものは相談ですが、何か且那のお好みを上げたいと思ひますが……」

警官稍々色を和らげ、

警「フーム本官の好むところの物を、呉れると申すか

忠「何ありと上げたいと思ひます

警官扼せし忠太の手を放し、ニヤリとして

警「人民チウ者は、誰も皆本官の嗜むところのものを持参するじや、その嗜むところのものを持参する人民に對しては、本官も相

當の宥恕黙認チウものを致すじや

忠「私も何分今晚の様な急用のとき、少し計御用捨が願はれますからば、それは……且那のお好みを、何なりと澤山に差上げたのです且那は全体ドンナものがお好です

警「本官か……そうだと本官の好物と申せば……マア小豆飯に油揚……ソレニ牛肉に鶏肉……マア魚類でもマア何に彼に依らず油濃いものはイイね

忠「私も油濃いものが好きで、取わけ鼠の油の揚ものなぞが好きですが、且那ドウです

警官顔の相恰をくすし、

警「フム其方も鼠の油揚が好か、アヤツの味と言へば論がないノウ、本官などが臆の落失する思をあす！

忠「且那もですか、私が鼠の油揚が好きですから、名まで忠太とつ

けてあるんですが、鼠の油の揚物丈は年中自家に、切らしたことがあいのです

警官咽を鳴らし、飛びつく思ひするらしく、ホタホタせるその顔を忠太の顔に突付け、

警「君は中々の見識家だ、そやつを是非持参物中に交へて貰ひたい………時に何時持参し來よる存心あるか

忠「今晚此處を通して頂けるならば、明晩の今頃此處まで持つて上がります、

警「フーム君はソノ本官の嗜むチウところの物を、明晩の同時刻に此の處へ持参し來よると言ふか、屹度陳述に虚偽があくば、今晚此の處の通過は本官が之を黙認し、君に對しての警戒を解く………又先の村の赤痢病の發生も、まだ本官が真正と認めとらない、コレハ虚傳の嫌疑をきにしもあらずだから、安心して

行くがイイ、君の住所姓名は何と言ふか

ポケットより怪げある手帳取りければ

忠「何々那何々村大字何々何百何十何番地雀忠太と言ふのです

警官柴の抽にて書留め、更に黙讀し忠太に向ひ

警「如何にも名は忠太だ子、中々イイ名だ一寸咽を鳴らせる氣合にて

警「明晩持参の約束は異變しあい子!

忠「中々持ちまして………併し且那あなたの一番お嫌ひなものは何です

警「本官の平素嫌ひ惡むで居るチウものはむく犬だ、むく犬チウものは世界の害物だ、赤痢虎疫ベスト以上に恐るべき害物だ

忠「イヤ御同感です、………デハ且那又明晩………左様ナラ

警「フム

訣れて忠太數歩行き過ぎけるに

警「ア、ユラコラ

と呼返しければ忠太

忠「ハイハイ

とて恐縮の体にて立ち戻りければ、警官いとも嚴肅の体に復り

警「其方の平常嫌ふチヨルところのものは何か

忠太笑顔を作りながら、非常なる厭忌の体を示し

忠「私は且那妙を奴でして、貨幣ほど忌むものはないのでして、三錢や五錢ばかりの銅貨を見ましても頭痛が致しまするので、百圓も二百圓も貨幣を見ました時は四五日發熱しまするので、一昨年且那餘義ない用事で、ある銀行へ行きました、行くまでは何の氣も付かあんだのですが、且那銀行と言ふ處が貨幣ばかり扱つてゐる處じやありませんか、魂消ましたを私しが澤山を貨幣

を見るありアツと其處へ仰向きに倒れました、跡は何も知らなかつたですが、氣が附いて見ると自家の寢床で、ウンウンと呻吟いて寢て居るのですが、ドウしたのかと聞いて見ると銀行で貨幣を見て氣絶したから、皆んをで擔いて自家へ連れて来て呉れたのだそうで、四十何日と申すものは熱病で苦しみ通しました、病氣中の熱のうは詞に、貨幣のい國へ行きたいといつてました相です、今でもあの銀行で百圓札の束を幾個も見ました時のことを思ひ出しますと、ゾツと身の毛がよ立ちまして戦ひ上るのです

まことしやかに述べるに、警官疑惑の眉を顰め

警「コレハ妙だぞ、吾々社會にこそ貨幣の用もあけれ、イヤナニ吾々は貨幣よりは職務を大切にせんければならぬのだが、凡人間チウものは皆貨幣ほどよい者があいなチウことで、本官等の

扱ふ犯罪も貨幣から起るのが七分あるのだが、其方がこれを嫌つテヨルと言ふは、虚偽の申し立てじやろーじやないか、ドウも奇妙だ

忠「お説が御尤です、誰も彼も私しの貨幣こわがりを不思議に致してます、私の父も困つたものと申しまして、大學病院へ行つて、ある博士さんに診て貰つたです、ソウト………五年前のことでした、その博士さんの仰しやるには、コレハ奇妙な病氣じや西洋では獨逸語コンダマスターと言つて、時々見る病氣だが、日本では薩摩の出水と言ふ處に一人と、お前で二人目だ此病氣は只今ではまだ治療法が發明されてないから、成るべく貨幣を見せあい様にして、養生させたが良かろーと言われまして、父も餘義なく貨幣を見せあい様にして呉れます、ソレニ博士の言はるゝには、此病氣に罹かつた者が奇妙に鼠の油揚

が好くとのことでしたが、鼠の油揚を好むものは金が入用かいだそうです、博士とも言はるゝ位の人、エライ者ですわー

警官此油揚好が貨幣不用の詞に著るゝ感動したる氣合にて

警「成程………ソウ聞ひて見れば道理だナー

忠「道理なんて旦那、私の病氣の事が醫學雜誌てふ本にまで出て居るんですせ、ウンと思ひあさるゝから大學病院へ端書出して見て下さい四五日の中には屹度返事がありますから

警「イヤそれにも及ばない、貨幣が確かに一番嫌なものだろー

忠「エーエー

警官又色を和らげ

警「イヤ今晚はこれで決れることにして、明晩は屹度好物をテー

忠「御上様に對して偽は申しません、左様ナラ

翌日忠太むく犬の極めて大なるものを索め得、暮夜にかりて犬を引

き前晩の場所に行きけるに、薄暗がりにも人の立てる姿を認めれば、犬の耳を右手にて握み、その良を自己の唇に當て、脊後に忍ばせ、近き人影をよく見れば、果然警官あり、前夜と同様佩劍の柄を手にして整然佇立せり

忠「旦那、お待兼ねでした

警「忠太か……イヤ今晚は

忠太愈々近くありて、『ホラ』と掛聲してむく犬を突き遣りければ、警官突差四ツ匍匐にあり、『コンコン』と鳴聲を放ちあわてふためきて逃げ散りぬ

忠太も急ぎ歸家し、自家の戸を悉く閉め、唯街路に沿へる小窓の戸のみ開け放ちて待ち居たりけるに、夜も稍々更けし頃家の四圍賑やかにありし氣合しければ、お出たと舌鼓して聞き居たれば、倍々騒がしくあり、窓口に群集し來り人の姿にてか、狐の姿にてかは知ら

ざれど、アホラ、アホラ、アホラと掛聲して、銅貨、銀貨、白銅、金貨、紙幣の束を數限りなく小窓より投込みぬ、程經て投げ込み終り群集去りし跡にて見れば室内貨幣の山を築きありけるとぞ

晩に遅く出る豆狸のパンシャツかすでないに

オスマンパシヤ(遅晩ばしや)とはこれ如何に

狐が高い處から落ちて逃げ散るでかいに

コンスタンチル(コンスタン)落る音散ると言が如し

面白い男だなー

雀忠太ある日、その知合ある智恵八合の男に向ひ

忠「君は一体をかした男だぞー

男「僕は鼻の先きに痣があつて、目が深い奥目にあつてるからナ」

忠「ソレモあるが君は一体面白ひ男だナ」

男「僕は先達て大勢の人の中で、屁を放つたことを言ふのんかナ」

忠「ソレモあるが君は全体面白ひ男だナ」

男「僕の處は婦旦那で僕は婦の前では頭が上がりず、婦に丁稚小野郎に扱はれるからかナ」

忠「ソレモあるが實に君は面白ひ男だナ」

男「此中僕は街路に立小便してたとき、犬に吠へられて逃げるに、小便が止まず走りながら小便で英語を道へ書いたからかナ」

忠「ソレモあるが君は餘程面白い男だナ」

男「此のあと久坂君の結婚披露の宴に招待せられたとき、僕が嘔した機に鼻の穴から鼻汁が飛んで出て、隣席の松本君の吸物椀の中へは入つたのを、僕もきまりが悪ひから黙ってたから、松本君

もそれを知らずその鼻汁入の吸物を吸ふてたのを、杉田君が注意したので、松本君は痛く立腹し、僕は同君に吸物の残汁を鼻を目懸けて浴せられたからナ」

忠「それもあるが君は中々以て面白ひ男だナ」

男「コーッ……先月廿五日天神サンへ参詣した時、僕の側の人が投げた五厘玉が、賽銭箱へは入らず外へ落ちたを、僕は素知らぬ良で一才拾つて懐へ入れかけたが、他の人は見付けて大聲で大勢の参詣者に知らせて、ドツと笑つたから非常に赤面して、又その五厘玉を賽銭函へ投込むだからかナ」

忠「ソレモあるが君は大体面白い男だナ」

男「ナノ何かナ、此間藤五郎方の板壁の松板の節の處に、薄赤色の何物かの小さい塊がひつついてたから、僕は赤砂糖だろーと思つて一甜して見たなら、松の脂であつたからナ」

忠「フムそれもあるが君は甚だ以て面白い男だナ」

男「コーッ……先達て新池で僕が垂を釣れて居つた時、大きな鯉が懸かつたから、僕はクワツと引上げたから、水面の處まで上つたときバツと跳ねた拍子に、僕はビツクリして蜻蛉返りに池へはまり込み、逆立ちにあつて頭は底の泥へ突込み、兩足交水面へ出してペンペン跳てたを、徳兵衛爺に引き上げて貰つたからかチ」

忠「ソレモあるが君はドダイ面白い男だナ」

男「日外や皆と一杯やつた時、僕は痛く酔はらつて其處へウタタ寝してたから、皆が糲味噌を捏つて僕の肛門の割狭へ押し込むであつたを、目が覺めてコレハ糞糞したのだキツイことしたと、僕が思つてナンでも皆の知らない様、廁へ上ろうと思つて居ると、中にチヨイ〜鼻を摘む連中もあるで、溜らなくあつて、

糞の落ちぬ様ヲニワニと可笑を足もとで、變挺を顔付して雪隠へ行つたが、後で皆が目引き鼻引きして忍び笑してたからかチ忠「ソレもあるが君は自体面白い男だナ」

男「僕の嫌がまだ娘で自宅に居つたとき、僕はキツ〜お的に惚れてドウすれば縁組が出来るかど、思案にあぐんで内山君に相談したら、同君はソレハいもりの黒焼をふりかけるに限るから、黒焼を買つて来て遣ると言つて呉れて、二三日して眞つ黒をものを紙に包むでコレはいもりの黒焼だつて、渡して呉れたから、僕は皆と嫌のうちへ遊びに行つたとき、素知らぬ振して嫌にふりかけて居つたら、嫌の顔や首筋は彼方此方眞つ黒にあつて、ブンブン怒る皆がクツクツ笑ふ僕は赤ひ顔するであつたが、跡で聞けば皆が僕を愚弄つて鍋墨をふりかけさせてあつたのだからかチ」

忠「ソレモあるが君は全く面ろい男だナ」

男「何時か山田に淡路人形打つたとき、假小屋の板圍に小さい節穴があつたから、僕はその穴へ目を當て、外から見てたら、暫くして仕打に見附られ、中へ入つて人並に見たら、木戸錢は一人十錢だが、ソナ處から望遠鏡で見たのだから、木戸錢は三人前だつて、三十錢とられたからかナ」

忠「ソレモあるが君は本當面ろい男だナ」

男「僕の癖が癪持だから、僕は癪の藥を逢ふ人ごとに尋ねてたら、連中は又僕を愚弄つて毘沙門堂の供華を、扉の掃子穴から兩手をズット一時に差込むで取つて來て、煎じて飲ませば即座に平癒と言ふから、其通り爲ようと思つて、毘沙門堂へ行つて兩手をズット差込んだら、中に誰かが居つて僕の手を中で拜み合せに縛つて、一日放つて置かれたからナ」

忠「ソレモあるが君は誠に以て面ろい男だナ」

男「僕は始めて大阪に行つたとき、小便所が誠に奇麗にペンキで塗つてあつて、その傍に焼杭柱の街燈の小形のが樹つてあつたから、コレハ何様か祭つてあるのだナ」と思つて、大阪の神様も拜むで置けばよいとて、文錢一文賽錢に投げたら、チャブンと音がして小便臭ひ嗅が鼻を打つたで、變だナ」と思つたが、若者に對して時々人が、まだまだ小便臭い哩と言ふから、コレは若者の神様だナと思つて、バチバチ拍手拍つて居たのだが、傍の人からコレハ小便所だすせと、教わて貰つたからかナ」

忠「ソレモあるが君は正真面ろい男だナ」

男「イツか皆と伊勢參宮した時、山田の宿屋で僕は自家の癖と自家で寝てる夢を見て、何か寢詞言ふたら皆が癖の聲色つかつて、寢詞問答で僕に癖との中のことを、スツカリ言はせてしまつた

からか子

忠「ソレモあるが君は素敵に面白ろい男だナ」

男「コウツ……此上まだ何かナ……思ひ出せぬ……」

忠「君はすばらしい面白ろい男だナ……面白ろい男だナ……」
つる中に、自分の面白ろいことを皆言つてしまつたナ……君
は眞實面白ろい男だナ

門迄来て隠れもせぬに

モンデスキュー(門ですくむ)とはこれ如何に

鯨を貰つてもしさいに

ポルテイル(鯨手入)と言ふが如し

魑の子

六造と言ふは、目玉をクルクルさせてよく彼方此方と睥廻し、其上
口のしるく大ある男にて顔形須濱に似たりければ、村人に鬼瓦と渾
名つけられけり、又久七と言ふは毎々よく放屁する男あればにや、
魑の渾名あり、ある日久七の男兒八九才あるが、六造の腕白子の同
年輩あると、六造方の門先にて諍し、大聲にて

久男「鬼瓦々々……うぬは鬼瓦の小伴じやないか、ヤ、鬼瓦々々
六造の子久七の魑と渾名せられけるを知らざるにや、唯

六男「阿保々々……う奴はド阿保じやないか……ヤア、阿保々々
久七の子倍々勢よく

久男「ヤア、鬼瓦々々……鬼の面々々……すはま……コライ
お寺の屋根へ上げて遣ろかい……鬼瓦々々……」

六男

「阿保々々……ド阿保々々……馬鹿々々ド馬鹿ヤイ……」

久男

「鬼の面々々……鬼瓦々々……、鬼瓦ヤイ々々々……」

折柄野良より歸り來れる六造、久七の子の氣附かぬ様その脊後に廻り、突差その腕をつかみ、鬼瓦顔に怒りを現はし

六男

「乃公ところは鬼瓦をらば、うぬは何か」

と銅鑼聲にてド鳴り立てければ、久七の子遽に消氣返り、伏目になりていともしほらしき聲にて

久男

「剛の子じや」

六造色和らぐ

犬をせり懸けても居あいに

ロツセル（ろツ迫る）とはこれ如何に

鉄砲あへににせられて居らあいに

スミス（酢味噌）と言ふが如し

火が消へた

秋風吹き立つて肌漸く寒くありたりけるある日の午後、炬燵と渾名せられける人の子十二三あるが、村外れの小池に跳ひ込みて、水中にて遊び又は色々戯れ居たりしが、さる口悪る男池傍の小路を通り合せ

男

「ヒヤー炬燵の子は炬燵の子だナ、はや寒くあつてるに水中へ

は入つといるナ、ヤイ炬燵の小倅、われ今頃水には入らざるらぬ程、熱く火は起つてるのんかい……」

炬燵の子は腹立ちあがらも、相手にせず尙も戯れ居たれば、口悪男も之れを見居たりしに、暫くして水中より出で來り、身体を手拭に

て拭きつゝあるを見るに、肌に粟をあらはしけるゆへ

男 『炬燵の子でも人並に寒いと見へて、顔へかゝつて居る哩
炬燵の子稍々目角立て

子 『炬燵の火は水で消へたんだい！

醉中便所へ匍匐ては入りもせぬに

シヨウペンハウエル (小便匍匐入る) とはこれ如何に
兄貴に向ひ残念がつても居らぬに

ニイチエエ (兄イチエー) と言ふが如し

乃公のこことだ

ある村長の父ありける人にて、蝻螂と渾名せられけるはありけり、

その身は著るく細くして丈はきわめて長く、且つ常に肱を張り居る
僻あるゆへ、此名を得たるありけるとぞ、この渾名は甚だしく村人
の口に膾炙しありて、唯その目前に於てのみ御隠居様と言ふのみに
て、他にては皆必ず蝻螂又は蝻殿と稱するあり、これ強ち侮嘲の意
にてしか言ふにあらざるも、蝻殿この蝻螂と言はるゝを痛く厭忌し
、人の之を言ふを耳にせば、怒氣天を衝くなり

蝻殿は當時村内にて第一の能書にて且つ舊式の博識家なればにや、
老後五六人村の若者を奨誘して夜學を爲さしめ、毎夜隠居の玄關口
の室にて、自ら書法を教へ雜書を解説し、以て老の樂しみとしける
に、若者門人等皆よく悦服せり、時々自己の若き頃の功名談、又は
劍道に秀すること、博學にして古今に通すること、何に彼にと法螺
交りの天狗ばあしにて、若者門人等を感服せしめて自らホクホクし
けるあり、若者等難解の文字を質問せば、其解説は取りわけ得々た

るものにて、毎に天下乃公の難解ある文字をしと、鼻の先にぶら下げける様子あり、毎々

『自体勉強と言ふものは、此處でする丈ではいけあ、日々能く心掛けて何處にでも、六ツケ敷文字あらば、見つかり次第寫し取つて来て乃公に質くがイイ、乃公の困る位の文字を搜し出して来なくてはイケあ、又乃公も一度字解に苦むで見たいと思つてるからナ』

説き聞かせありけるゆゑ、若者等競ふて難字を索め、幾回か質しけるに未だ蝻殿を苦しましむるを得ざりき
ある日若者の一人某所にて蝻邸の文字を見、コハ甚だ六ヶ敷文字あり、流石の蝻殿も此文字ならば解に苦むべしと勇み、寫し取り歸り更に白紙へ方寸大に字畫正しく清書し、其夜例の如く上座に曲録に凭れる蝻殿近く座を進め、かの文字を差し出し敬しく

『若今日晝間斯様を文字を、さる處にて見て來ましたが、サツパリ意味が私共には判りませんが、御隠居様コレハ何と申す文字で
すか』

蝻殿此字を一見するや、眼光怪しく光り目を尻尖く見詰め居るゆゑ、若者心に隠居困りおつたナと喜び居るに、こたびは額に青筋太とくあられ來りければ、若者隠居ドウジャウと心に首筋を押へ居る中、隠居顔面朱を注ぎ來り、怒氣満々たる体なれば、若者六ヶ敷文字を索して來ひ、乃公を困らせて見ろと高慢言つて、索して來て自分が困まらせられて、怒る奴があるかコレカラ餘リエヲ相あこと言はぬが良い、此乃公様には叶ぬだろうと心に鼻を高くし、尙も答を待ち居るに、蝻殿奥齒を低く鳴らせる氣合し、小鼻せわしく呼吸し來りて遂に座を起ち直立の儘、大喝一聲

『コレハ乃公のことだ……今から歸家れ！』

ツト内に入る、若者仰天！

坊さんの頭を紋所にし居らぬに

ソロモン（僧侶紋）とはこれ如何に

水音高く池に跳ひ込みもせぬに

ダビット（だぶつと）と言ふが如し

蟻のだしがら

禪宗來迎寺と言へる山寺の住職、愚白上人と言ふは徳高く品行謹嚴にして、來住以來未だ一回も肉食したることなし、同住の門弟雜僧五六人皆十四五才より廿二三才迄の若者ばかりあり、上人之を督する嚴正ありければ、雜僧等魚味を解せざりき、一雜僧ある日里に出

で里人と雑談中、蛸の味ひ甚だ美あることを聞き、歸りて皆の雜僧に語りけるに皆咽を鳴し、何時か師僧の不在に乗じて、蛸を味ひ見むと評決して、機をうかひ居たりけるに、師僧所用のため一泊がけにて他行しければ、小僧等好機逸すべからずと雀躍し、麓ある街道は日々肴屋が通過しけるところありけるゆゑ、年嵩の小僧二人蛸買ひ掛として山を下り、肴屋を待受けけるに、果然一人の肴屋來れり小僧前後を見回しあがら、小聲にて

「オイ肴屋！」

「へいへい」

「蛸と言ふ肴はあるか」

「へいへい一ばい丈大きい奴を持つて居ます」

「フム一其大籠に一ばい入つてるんか」

「ナニ一ツ切りしかあいのんです」

僧「デモお前が今一ぱいあると言つたでないか

着「ナニ鳥賊やこれが一匹のこと一ぱいと申すんです

僧「ハハアアそうか、見せて呉れ

小僧二人共尙も前後を見回し、人に見らるゝを心配するしこゝをし宜敷ありるけ中、肴屋荷を開き

肴「コレです立派なものです

僧「大きいナ、繪にあるのと同じだナ、何程か、

肴「毎度御ひいきにあるんですから……

僧「コレコレ肴屋毎度ナ、ソナ虚言いつて呉ると困る、今まで一度も買つたことはないでいか、ソナ虚言が擅徒の耳には入ると、僕等がキツク困る

肴「へいへい一ペン限りのことですから、お安く致しまして五十銭にお負けして置きます

雑僧代物を拂ひ、蛸受取り

僧「肴屋、ドウすれば一番美味かねー

肴「ソレハ大の鍋へ水を澤山入れて、湯がきまするんで……

酢蛸にしてと口まで出たを、蛸と言ふは此お客様には失禮と思ひ、前刻から蛸と言ふを避け居たるに氣付き

肴「へへへへ……大きに

とて立ち去りければ、二人は蛸を携へ寺に歸り

甲「君等蛸が手に入つたぞ、煎るでいか

乙「これが子大鍋へ水を一ぱい入れて、煎るのだソウすれば一番美味んだ

と知つた顔に言ひければ、年若小僧は大鍋にてよく煎たりしに、蛸の色も赤くよき色になり、汁の色も赤くよき色になりければ、皆鍋の周圍を取圍み

甲「ヤア―蛸もよき色にふるし、汁もよい色にあつた子―」

乙「イカにも………是れは蛸を食ふんだらうか、汁を吸ふのんかド

チラがよいのんか子―」

丙「ソレハ蛸を食ふは當り前だ」

甲「君はソレを知つてるのんか」

丙「イヤ知らあいが、ソウ思ふんだ」

丁「ナニそれは汁を吸ふのんだ」

乙「君は知つてゐるか子―」

丁「イヤ僕も知らあいが、河豚汁鯉汁と言ふことを聞てるが、矢張

蛸汁が美味いんだろーよ」

乙「フム僕も河豚汁鯉汁と言ふことを聞いたが、ソレハソウだろー」

戊「ソレハ蛸を食つて、ソレカラ汁を吸ふのだ、ソウソウそれにき

まつてる、僕も精くわいことは知らあいが………」

甲「ドチラにすれば良いか子―」

一同「ドウモ判わかからあいな」

前刻來寺門に筵むしろを被かりて、假かり寢し居たりける男乞食、ユノ評定ひょうじやうを耳にしムクムクと起上りて、しをらしげに、庫裏くらの戸口に立ち、大なる缺かけ椀わんを手にし、腰を軽くかゝめ

乞こ「ドウゾ蛸たかの出だしがらでも、かまいません、ドウゾ頂ちやうかせて下くだだ

さい………蛸たかの出だしがらでもかまいません………」

一同「ヤア―判わかつたこれは汁を吸ふのだ」

と小聲こゑにつぶやき、年若小僧ねんわくしやうが金火箸かねひしやうの尖さきを蛸たかの頭かぶに突つ込み、湯氣ゆきの盛もんに立ち上る蛸たかを、戸口かどへ持ち行き、乞食こじきに與あへければ、乞食こじき一寸黙禮もくらいし蛸たかの湯氣ゆきを吹きつゝ、喜びつゝ山下やまもとに下くだり行けば、跡あとには一同蛸たかの湯ゆに舌打したしけるとぞ

閻魔さんの代回禮でもおいに

レヲニダス（禮鬼出す）とはこれ如何

手かい坊の慈善團でないに

ヲミストクレス（手見すと呉れず）と言ふが如し

雷 買 ひ

雀忠太、春月老に向ひ

雀「先生此間の雷が随分大きいかったですナ

春「大きいかつたとも、乃公もビックリしたよ、五ッ目位のは耳は破れる様であつたナ

雀「左様々々、あ奴があゝた山田へ落ちましたつて！

春「ハハア、そうかナ、イヤあれ位のは落ちるだろーよ

雀「ソノ落ちた奴は山田の人等に生捕れたのですつて！

春「馬鹿を言いかさんナ、今時息する雷はあるものか、昔こそ雷は全くドンナ者か知らあかつたから、鬼に太鼓持たせて雷の正体としたり、又猫に似た毛物だソの證據には落ちた處には、あちこち搔附いてあるキツイ爪のものだと言ひつてたが、亞米利加のフランクリンと言ふ大先生は、空氣の冷熱の激變から起る電氣の作用だつて、これを實用に利用することを發明したのだ、今の電車や電信電話は、皆この雷の門弟共に働かさせて居るのだからナ

雀「ソノ事は先生から毎々承つて居ましたが、論より證據それを買ふものもあるのんですからね

春「奇妙だナ………」

雀「奇妙奇手烈ですせ、あの雷が山田の村外れへ落ちると直ぐ、あ

の村の徳平てふ百姓が自宅の雪隠へ行きましたら、雪隠の床下の糞壺の周囲の處をガサガサ走り廻つてるものがあるんですて、

雀

「フムフム

「何かいと思つて俯向いてよく見ましたら、ツイぞ見たことのない動物は居るので、猫に似て居るが猫でもなし、不審にも見詰め居る中、雷が猫に似た毛物だと気が附くや仰天して、雪隠を飛び出で、イキナリ街路迄走り行き『乃公處の雪隠に雷が隠れて居る！』と叫びましたのですつて

雀

「フムフム

「スルトあゝた何が扱村中が落雷の話で一ぱいになつる時ですか、『ソリヤ村外に落ちた奴は徳平方の雪隠へ逃げ込むのだ、皆行け！』』『ヤア生捕れ！』』てあなた山田の騒言つたらソリヤあかつたので、男頭總出、向ふ鉢巻、手ん手に鋤

鉄棍棒火吹竹、蔦口刺股鎗ことぢ、千本の竹槍を二三日がけにて藪に切りに行つたものもありーい、折柄牛に勝り十能小脇にかい込み、あらわれ出でたる一人の巴御せーっーッー……

雀

「あほう言ひあさんナ

雀

「ハハハハッハ、兎に角皆がワイ々々言つて、徳平方の雪隠を取

圍み、一人は中に入り竹棒で追ひ出しましたら、肥汲口より一匹の雷が跳び出たを、皆で生捕りまして、場先へ持つて行つて雞籠で伏せ頃合な石を重しに置いて、ソノ周囲で皆が色々取り取りの話をして居ますと、其處へ通り合せたは峯町の馬友と言ふ米屋、あなたもあの人御存でしよう

雀

「フムフムあの氣柄のよい、あづさりした男！

雀

「左様々々、あの馬友が皆が雷を生捕つたつて、ワイワイ言つて

ますから、奇体なこともあるものだと思つて、かの雞籠の處

振もせずよい返事も呉れぬ別嬪でないに
 フランクリン（振らぬ呉れぬ）とはこれ如何に
 掛物で損もせぬに
 エヂソン（畫で損）と言ふが如し

いびつの顔

學生あがりらしき男の、二人打向ひて語るを聞きけるに

甲「君、人の顔は誰のも彼れのも皆いびつに出来てるんだつて子
 乙「ソウだとも、顔の真中に縦線を引ひて、二分し左右を精細に比較したからばだ、豊瘠大小凸凹の差は必とあるのだ、この人の顔の歪むで居ることは佛蘭西人某の發見するところに係つて居

るのだ

甲「そうだつてね、僕も此頃漸くこのことを聞いたのだが、此いびつになつてる所に顔の美があるのだつて子

乙「ソウだ、左右平等に恰も分廻で造つた用器畫的の顔があつたからばだ、ソレは見られた者じやないのだ、左右の曲線のちがつてるところに、愛敬も威嚴も貫目もあらゆる顔の美點があるのだ、で巧な寫眞師などはこの個々人人に違つてる曲線のいびつを利用して、人の向き方を考へその人の顔美を發揮することに腐心するのだ、

甲「成程ソウだね、佛像佛畫等には時々左右均等の顔を見るが、全く無趣味で丸でオモチヤの相に思はるゝが、萬人に隨喜渴仰せしむる本尊とするには、此等の畫工彫刻家が甚だ誤つてると思ふ子

五 『大きき畢丸じやナー……併しこれとは比べ物にからないじや
あいか

金 『ナニ乃公の方が大きき

五 『馬鹿な！、お互に目盲であるまいし、犢牛の百分一もあるかい
金留首を強く左右に揮り

金 『イヤイヤ畢丸の方が大きき

五 郎喜馬鹿臭いと言ぬばかりの面持にていとも齒掻ゆげある調にて
五 『シーナことを、コレ金留よく見ろい、牛の方が大ききことは三
ッ兒が見ても判つてゐるでないか、イツ迄も人を馬鹿にするかい
、君はトウモ無茶苦茶を男だナー、顔を洗つて来い！

金留きわめて静かある調にて

金 『ヤイ五郎喜、乃公と君が互に自分のものゝ方が大ききと、言張
るはこりや畢竟は水掛論と言ふものだ世間は鑑皆に見て貰ふ！

五 『ホーそれが至極よい

とて相談と、あいか、金留左手の拳に畢丸を拗ひ上げ、前に突出し反
身になりて先に立ち濶歩し行くに、五郎喜犢牛の手綱を右手に持ち
チャチャとて揖取しつゝ之に随ふ、行く三十歩計にて男生徒二三に
出逢ふ、生徒行き過て小聲に

甲 『面白い人等だ子君、あんな大きき畢丸出して行く人と、あんな
小さい牛引ひて行く人と

乙 『ホント子、僕はあんな大きき畢丸も、あんな小さい牛もまだ見
たことはあいか

金留心に『ハお出でた』とてホクホク、五郎喜は顔をすこし歪めた
らし、又少し行きて五六人の若者に出逢ふ

甲 『ヤアー大きき畢丸と、小さい牛は来たぞー

乙 『ホーありや大きき者と小さい者との見世物だ、あの畢丸つたら

ビーコンツファイルド (跛僧放るど) はこれ如何に
ツルツルした急坂でもおいに
サリスベリー (猿すべり) と言ふが如し

負けとけく

岩右衛門とて勤儉と足早にて名高き男ありけり、ある日町に出で買物しけるに、毎に買馴れし雜貨屋の店頭には、焼方よろしき土寶祿あるを見

岩『ユノ寶祿は幾程か』

店『一ツ五錢五厘です』

岩『五錢五厘は高直い、外の店では五錢だ五錢に負けたり』
店『自家は懸直おしたから、一厘も負かりません、外では六錢五厘

に賣つてる品物ですが！

岩『マアマア負けて置き子、タツタ五厘だ』

店『五厘でも一厘でも自家は負からぬ店だつてふことは、あなとも知つてるでしょう』

岩『今日は錢は五錢しか持合はさぬから、今日丈負けとき子』

店員頑としてきかざりければ、岩右もどろしがりあたりには落ち散りあるくす繩にて、土寶祿をくもり自己の携へ來れる細き艇の端に釣り下げ、懐ある古き革財布より銅貨五枚取り出して店頭に並べ

岩『マアマア今日丈これにして置いて！』

店の人仕方がおいと思ひながらも、岩右の仕草に目も呉れず、ツンとし居たりけるに、岩右寶祿釣れる小艇を肩にして去りぬ

跡にて店の人銅貨を見るに、貳錢銅貨五枚ありけり、これ岩右壹錢五枚とはき違へたるあるべし、五厘すら今の如く喧嘩腰にて直切る

あるに五錢も過拂させては氣の毒と思ひ、急ぎ岩右を追駈けその後ろ姿を認めければ、大聲に

店「オーイオーイ

岩右此方ふり向きければ

店「オーイオーイ錢が多う過ぎて居るぞ！

岩右手を高く揚げ、押へつける手振りして

岩「負けとけく！

倍々急行しける故、店の人も急走しあがら

店「錢が五錢多いんだい！待て々々！

岩右走りあがら手丈此方向け、尙も押へる手振り

君「エ、負けとけく！

足並急急あり、店の人聲を囁らして

店「アツ苦いオーイオーイ錢が多いと言ふのんだい！アツアツ

岩右同じ手振して、聲一層張り上げ

岩「エ、負けとけく！

こたびは疾走とありて、臍の如くに遠く去りぬ

年寄を抱きもせぬに

ジャンダーク（爺やん抱く）とはこれ如何に

購買商人に肘鐵を喰はしもせぬに

マリヤテレサ（まり屋照れサ）と言ふが如し

兒は泣いて

雀忠太又春篋老許至り

忠「先生あまたあの藪内のぼけ六てふ男、知つて居あさるか

春「知つてるども、あのぼけ六の親父は中々の甲斐性かいしやうもので、一代にウント致富ちふしたんだ、ぼけ六はお人よしだから他人ひとに欺だまされて親父の死後、餘程減したと言ふが、ソレデモまだ大分はあるだろうよ

忠「エ、ありますども、まだまだ此村こむらでは七八人目位の財産ですが、しかし可愛相かわいさうに此頃嬬かたろに死あれて、よわつて居ますせ

春「ソウだどナ、子供は澤山あると言ふが、ソレには困るだろうよ

忠「總領娘は十四で、その裾男すそおとこ三人に女三人べて七人ありますが、それにぼけ六は子煩悩こわんぼうであり、殊に死むた嬬村屋かたろむらに大變惚まぼろしたのですから、嬬かたろの忘れわすれ筐かたろだつて、ソレハ々々子供を大切にしますせ

春「感心だナ

忠「處があなたあのぼけ六は、五十三圓の借金で春藤さんに願ねがはれましてナ

春「フムフム春藤と言へば、ぼけ六と向ひ同志の家だかいナ

忠「左様々々、ナニあかた私が親族會があつたものですから、一昨日區裁判へ行つてましたら、ぼけ六も其處へ來ましたで、何用かと訊きましたら、春藤さんに願はれたのだと言ふじやあいですか

春「フムフム

忠「ソレハ隣家同志で困つたことをするを、併し今となつては仕方があひ公判をせねばあるまい、乃公も傍聽してやるから、公判廷ではよく氣を落付けて、借りたものだから速に返却すると申立てるがよからうと、言つてやつたのです

春「尤だナ

忠「しばらくして公判と言ひますから、私も傍聴席へ行つたです、
 處で春藤サンは安辯護士を代理に出してありました、ぼけ六
 は判事の前に立つて、顔を眞赤にしてブル々々顫ふて居る様子
 ですから、私も傍聴席で手に汗を握つてますと、色々の式手續
 がすむで、裁判官は被告に向ひいとも嚴かに、僅少の金錢の爲
 めに訴訟すると言は不都合だかい、速に返金するがよからう
 と言ひますが」

春「フムフム」

忠「ぼけ六はドウ答へるか片唾を飲むで見て居ますと、顫へ聲で『
 兒は泣いて、犬は噛むで、嫌死んで………』

春「エエ！」

忠「兒は泣いて、犬は噛むで、嫌死むで」

春「ソリヤあんのこつちやい」

忠「辨りませんでしよう、聞てた人にも何言ふのか薩張我らがかつ
 たです、原告辯護士も書記も皆けいんを顔してました、判事も
 少時目角立て、ぼけ六を睥つめてましたが大喝一聲、馬鹿ッ早
 く返金しろい下れて言はれ、ぼけ六は顫ひつゝ退席しましたの
 です」

春「奇妙だナ」

忠「ナニ答辯の心は無理があいのですが、詞は足りあかつたのです
 、私も餘り挺變を答辯だと思つて、歸家る途々訊いて見ました
 ら、ぼけ六はあゝたユウ言ふと思つたんですつて、私の方と春
 藤サンとは以前から至つて懇意を間柄でもあり、又向ひ同志だ
 から此迄とても、五十圓や百圓の金は此方に借ることもあり、
 彼方へ貸すこともあり、こんなことは度々あるのんですから、
 此金も春藤サンから返せと一寸言つて呉れたなら、御上様へ煩

お前かく

平四と言ふは「亭主が女房に惚れて家は無事」と言ふ川柳に、ソツクッ當てはまる男にて、その山の神との中は、比翼連理伉儷の艶實に羨望に堪へたりと言ふ奴ありけり、左れど平四は一代に身上を仕上げる程の男とて、節儉的にその大家族を嚴督する極めて酷にして、家政上の過失を叱責するその愛妻に對しても、すこしも容赦せずこの時だけは別人の如くに、ド鳴り散らすあり、それ故妻過失ありたるときは晝間は之を秘し置き、夜寢物語にしかじかの過失したることを自白し以て謝罪するを毎とせり、此時の平四は又別ものにて、如何なる大過失にても、「ア、かまはぬ〜」とて半句叱責せざりければなり

ある日妻家一番の大鍋を過つて取り落し、粉粹するまでに破却したりけり、晝間このこと平四の知るところとあれば、地震雷火事、親父一時に襲來し來べければ、過を悔みながらもソト破片を秘し置き、夕食終り少時家族團樂の快話し、舉家臥戸に入り、夫婦衾中枕を並べて後

平「モシ

平四目を細くし

平「ウム何か

平「私は今日申し譯のあいことを致しました

平「ウム何したのか

平「何分これからは屹度心得ますから、何分御了見して戴きたいので平四極めてやさしき詞づかひにて

平「お前の爲たことなら、何んをこと爲たつてかまわぬ、何を爲た

のか

「私」は今日一番の大鍋を破りましたのです……………」
平四一厨やさしく

「大鍋の一ツや二ツは何か、お前ならば何んかことしてもかまわぬ、まだ毀りたくば、外の鍋おりと釜おりと、鉢おり皿おり自家の物皆毀つてしまへ！……………」

「ソレで私もヤツと氣が落ちつきました

とて程經て交々夢路に入りぬ

翌朝舉家早起し、朝食前の仕事をとて皆野良に出で、妻のみは家にありて朝食の仕度を爲しけるが、謝罪すみたればとて大鍋の破片中庭に取り出し置きけるに、逸早く野良より歸り來りし平四この破片を見、よべのことを打忘れけるにや、大喝

「誰だ、大鍋毀つたは！」

妻はやさしく

「その申譯は夜前にナ……………」

平四目を細くして聲色やさしく

「ヤお前か……………」

とて軽く頷きつゝ又逃ぐるが如く家外に出で去りぬ

六厘のステッキ持つて居らぬに

ツエルクリン（杖六厘）とはこれ如何に

微かきの鶉飼でかいに

ウイルヒョー（鶉入るひよし）と言ふが如し

チユチユチユー

北口の甚助は鼠甚と渾名せられける男あり、この鼠甚の村は家毎に渾名あるところにて、鯛重とか瓢箪政とか炬燵寅とか色々乙力あるものあるあり、併も村人皆自家の渾名を言はるゝを痛く忌み、人の之れを稱ふるを聞かばその人憤々立腹すあり、鼠甚は悪戯男にて村人の渾名をその人の聞居るところにて稱へ、その立腹するを見るを無上の樂みとする男あり

ある日鼠甚その愛娘の十三四あるを伴ひ、町に買物に行く道すがら甚娘今日は時々早足で逃げかくてはあらぬぞ！

娘父さん又今日もいつもの悪戯して！、あたし氣の毒だわー

甚何に氣の毒なことはあるか

と言ひつゝロンドン松、雲政、鼻辰、法螺時、大砲友の門口を過ぎ行くに、道近くに其家の人々居らぬ様子ありければ、黙して通過し炬燵寅の門邊に至り人の聲、その家より洩れければ、鼠甚立ち止ま

り大聲にて

甚娘！待て、

娘父の袖を軽くひき小聲にて

娘父さんイヤですせ

鼠甚これには一切御かまいなく、

甚こゝで緩り暖まつて行かう！、自家から町までにコンナ温かい處はかいんだ

炬燵寅の老母之を聞付け戸口へ馳せ來り、怒り聲ふり立て

老鼠甚ソリヤ何言ふ、聞かぬぞ！

甚ハハア聞いて居たのかハハハハ、コレハ氣の毒かハハハハ、娘サアサア早く行こうくハハハハ………

娘の手をとり足早やに行く、次に雷文の門邊に至り又大聲にて甚娘！桑原々々と言へ、ソシテ臍をよう大切に置いて置くじや

サアサア早く行こう〜ハハハハ

コレヲ増の近くに又大聲

甚娘待て！

娘父さんモウいやよ、私こまつてー、ホント困まつてよ

甚かまわぬ〜こんな面白ろいことはあんだ……………

此處で消毒しなくては、娘石炭酸あるか

家には主人の聲

主鼠甚つまらぬいこと言ふあ

甚ハハハ聞こへたかハハハハ、氣の毒〜ハハハハ、娘！早く行こう〜ハハハハ、

天留、羅漢徳、小便友の門邊は人氣なければ素通りし、糞清の戸口にて

「娘！鼻をつまみずー、ア、臭さーア、臭ひ〜糞の嗅で鼻はゆ

がまー

家内にはけたましく

家人「チヨツ又鼠甚めが！

甚「ハハハ聞てたか〜ハハハハ、氣の毒だ〜ハハハハ、娘！早く来い〜ハハハハ

次に地雷權の家近くありて

甚娘！足下を氣を附けなくては、踏ごこの都合で爆發るぞよ

家では

家「何んだと！

甚「聞こへたかハハハハ、娘行け〜ハハハハ

猫源の戸口に至り

甚「娘此處では生臭いものは見せられぬじや……………
家より主人跳び出で来り

主「ウヌ鼠甚め、生臭よりはう奴を食つてや……」
昔「娘お前もチユーチユーチユーつて言へ、チユーチユーチユー
鼠鳴しつゝ遠く馳せ去りぬ」

逆を食いに^で出て来た蝦蟇^でかいに

バスコーデカマ（^{はく}逆食う出蝦蟇^ま）とはこれ如何に

氣は顛倒して靴を食た^でかいに

キヤピテクツク（氣やべてん靴食^く）と言ふが如し

無効の節約

新六と言ふ瓢輕男ありけり、例の春篋を訪ひ

新「先生お久し振ですが、御さわりも御座いませんか」

春「ヤア！新六君か！、相變からず吐ひてるか子、雀君は日々見へ
るが中々吐ひてるせ」

新「何を吐^つて言ふんです」

春「知れたこと虚話をハハハハ、、、」

新「ハハハハツハ、時に先生節約と言ふものは世間で八ケ間敷申し

ますが、何にもあらぬ者ですナ！

春「ソナナことがあるものか、殊更此節は知事サンや郡長サンから
人民たるものは、節約して貯蓄せんければあらぬて、モ度々御
説諭があるんだ、これは皆人民たるものゝ爲を思つて下さるの
だ、中々おろそかには出来ぬじや……」

新「デモ私は節約てふものは、してもしあくつても同じだと思ひます
春「何故！」

新「何故つてあまた、私の處の山の神が此あとに双子を生みました」

が、ソレ丈でも儉約の役に立たぬことは判りまさあー

春『奇妙なことを言ふ男だ、併しマーそれは芽出度、シテ母子三人とも達者かか子』

新『ヤ難有うお陰様で達者お丈、喜むで居ります、私は今度の双子で子供はあまた、十二をそらにして十二人にありましたのですが……』

春『ソレは結構な子寶だ、あやかりたい子』

新『ナニあまた子供は何十人ありましたが、問いませぬのです、ソリヤ顔を見れば皆可愛のんですから、シカシ私の處は皆年子に出来てるんですが、始の中は左程にも思ひませんでしたが大サ一あまた年兒は五人六人續ひて来ると氣が病めますが、畜生物かかんずの様に一年に一人宛子が出来ましては、人の口端に上るであらう、二ツ又は三ツ位違ひに出来て呉るればよい』

がと、心に祈つてる中に今年も、早や出来てませと嫌の上申でギョツとは致しますが仕方がありません、嫌もこれ丈は氣に病めると申しまするし、私は勿論のこと年寄夫婦もあまた、産のある度に又孫が一人ふへた嬉ひくつて、喜んで呉れますが矢張内々ではこれを氣にして居るらしいですが、

春『尤だ子』

新『今年こそ生れあいようと念じてますと、嫌がモシク今年もですせ、當年こそは念じてますと又今年もですせてんでしよう、助かりませぬが……それにあまた九人目のやつの時でした、七月に入つても嫌が何とも申しませぬで、今年ハモウ占たものだ、ハヤ七月に入つたに今年もですせを聞かぬ、今今年もですせを聞かぬところで、産は來春だ嫌めは大變を功名をしたものだ、と思つて嬉くつて溜りませんが、デ心であまた』

ライ世間の唐變木共、冬になれば目に物見せて呉れるぞ、新六
 サンは今年には産ないんだい、ソウぞ畜生の様に一年に一人生む
 に決まつてるかい、愚圖くぬかす奴はあらば、乃公の嬬に訊
 いて見ろいへんとて胸の中で力瘤ちからこぶ入れてますと、其月の中頃に
 なつて嬬にがつかりさせられました

春「ドウしたのんかい」

新「山の神めがあゝた又今年もですせと言ふじやあいですが、ナニ
 今からあらば産は來春にある今年に占めたものなんだと言ひま
 したら、あゝたは年々氣にしてるから、ちつとでも後おそく知らせ
 てとて控へてたんですが、モウ五ツ月にあつてます、とコウで
 すが、指折つて勘定したら十二月は臨月ですがナーツイワイ
 ワーイ……………」

空泣す

春「ハハハハ、ハハハ、阿保う言ひあさん……………」

新「ハハハハ、ハハハ、丁度一昨年こぞの暮までに年兒ばかり十人でしよ
 う……………ソコデ此上は愈助からんと思ひますから、嬬に何か良
 い考があいかと相談しましたら、流石は私方の孔明です感心あ
 ものです、一ケ年儉約しようと言ふんですが」

春「何を一ケ年儉約すると言ふんか子」

新「へへへへ、ハハハ、」

春「奇妙なこと言ふ人だ、一向判らん！」

新「マ一何んでよろしい丸一年は固く儉約を守りましたか、争は
 れぬものですせ、昨年こぞは一人も半人も生れませず、ヤレ々々と
 胸撫むで下していても目出度い新年を迎かへました

春「フム々々無理があいね」

新「スルト春早々こぞ嬬めが今年には又産がありますせと、警告しますか

と平たいらげたそうです

春「見事みごとなものだナ」

雀「何時いつかもあかた、若者が寄合つて寅の大食を、賭かこゝにしたのだらうで、麥の一度煎い三貫と赤砂糖四斤、それに生の泥鰌七百目、此丈一時さきに寅に食はせるのです、寅が食おひ終おせたから一圓の賞與を貰ふのです、食おひ切れぬ方から賭かける者と、食おひ終おせる方とですが、寅公しづかに麥の一度煎い食つて、次に砂糖甜めて、其次に泥鰌を噉つてしまつたてふことです、泥鰌が生きてたのが大分おほあつて咽喉で跳ねてヒンヒン行いき當あつたて寅公が言つてましたと

春「ゑらい者ものだナ」

雀「又二度目の賭かの時は、峯町の寅屋の菊饅頭を斗桶に一ぱいですつて、これも寅公奇麗かほに平たいらげて平氣かまを顔かほしてましたとサ

春「豪氣ごうきなものだナ」

雀「まだく幾回も食はし賭かをしたそうですが、何時いつも食おひ切れぬと言ふ側の敗北ですつて、この敗北連が悔しがつて色々謀議の末、醬油三合飲のむで草鞋一足食つて、その次生の高野豆腐十個食ふてふ標題で又賭かツこしたのです、尤も食切つて終しまふまで水一滴飲のむべからずの條件ですが」

春「キツイものを食たわせるナ

雀「これは流石の寅洲大弱おとよわでしたと、醬油三合飲のむたら顔が李なしの熟した様ような色になりました、酒に酔よふた赤あかさと違つて、黒紫色にありますと、ソレから咽が渴かわひて仕方がない處へ以て、草鞋一足食つたら咽が加かすれて痛いたくあつたそうですが、それでも何分あんを男のことですから、一切かまわす高野豆腐にかゝりましたら三ツ目に咽から出血して止とめたのですッて！

春「ソレは大食じやない無理食じや、可愛相に

雀「平生でも久作サン方には困まつてますそうで、皆があなた毎々外の家へ遣りたいくと言つてますが、老母丈は寅は十二の年から自家に奉公してるじや、大食には困るがその大食もこの家であんかにかつたのじや、親も兄弟もあし三十幾ツと言ふ今にかつて、嫌にあり人もあし可愛相なものだ、誰が何と言つても寅は生涯此家に置くのたつて子、ソレハ可愛がるのです

春「感心な心懸だ子」
雀「だから寅公も老母の言ふことはよく聴くそうで、御飯時に老母は寅公「モ」宜しいぞと言ひますと、直ぐ止めますが、外の人そんなこと言つたつて中々箸を放さないそうです

春「ソ、ウ、か、子」
雀「處があちた二昨日の朝大變を大食しよつたそうです、久作サン

方の方は皆朝食前の野良仕事に出ましたが、寅公丈は腹が痛むて寢床に居つたのです、老母は朝食にとて粥一升五合ばかり煮たそうです、家内は大勢ですから、粥が出来たものですから近く田甫に居る皆に朝食を知らせに行つた跡で、寅公ノユノユと出て来てその粥をペロリと獨で平げてしまつたのです

春「ホ」
雀「皆が朝食に向ひ鍋の蓋とつて見れば、空ッぽですが、呆れ返へるじやありませんか、老母は寅公お前が食べたのかと訊きましたら、フムと頷づいてるのでさ、お前腹が痛むと言つたてあいかと言ふと、あれ丈の粥で治つたて言てますのですと

春「粟俵だ子」
雀「シテあちた仰向だまに寢床の上へ寝轉むで、平手で腹をボテボテ叩きもつて、新池に一ばい南瓜雑炊食いたイ、と呼つてま

雀「先生此中神様から手附金を取つて来たものがあるんですせ
春「フームそれは奇妙だネー」

雀「あの蜻蛉常てう男、あ奴の瓢箪と来たら仕方がないですわ、此
間もあの仙平の葬式に行つて、皆が三十六や七で死ぬとは可愛
相だつて、親族故舊がワイワイ言ふて泣いて、殊に連合や親御が
目を泣き腫らしてる中で、友達の一人たる彼れ蜻蛉常文は、酒
亞々々然として滑脱なことばかり言つてるんですが、

春「氣の毒をことする男だネー」

雀「お寺に向かつて亡仙平君は地獄の何郡何村に若ちますか、と問
ふんじやありませんか、ソレニ仙平君は一才助的であつたので
すから、地獄でも妾狂は出来すかつて、ワイワイ言ひます
からお寺さんも仕方がないから、苦ひ顔してまだソコまでは調
べてないと答へますと、フーム佛法には地獄通信がまだないの

かつて遣り返すのです

春「ハハハハ小氣味がよいネー」

雀「あ奴があなた昨日長村の天神様から、手附金取つて来たんです

春「ホー」

雀「あ奴の友達は七八人ありますが、皆交情が宜しで何處の神社佛
閣へでも皆連だつて参詣するそうですが、蜻蛉常は今までにま
だ賽錢を一厘も上げたことはないので、右の手の指で錢の
形容の輪を造つて、賽錢箱目懸けて投げ付ける手振する拍子に
、その輪をはさすのですと、

春「ハハハハ」

雀「皆がソナナ勿体ないことするかと、八ヶ間敷言ふと、是は志文
上げて置くのだと言ふんですと

春「うまいネー」

雀「ソウデス月給十五圓とか六圓とかの書記にあつてるんですが、仕事は圖坊良で月給が早く欲しがらつてんで、役所にも困つてゐるそうです、ナニあなた遊びごとは好きで、目腐れ金計りつかいたいてんですからね

雀「困つた貨物だナ」

雀「ナンでも勸業とか土木とかの或る仕事を受持つてるのだそうですが、事務が薩張上がらぬのです、人民から係りのことを何言ふて來ても、ソレはあさつてにして呉れ、郡長サンや課長サンが此事はドウなつてるか、これはドウするかと訊きますと、何時でもそれはあさつて處理することにして居ますつて、イツも答がさまつてるんです、ソレで役所内では圖良雄のあさつてと言つて通りものにあつてるのです

「ホント厄介だナ」

雀「イツかも課長サンがあなた一度説諭したそうです、圖良雄君昔から紺屋のあさつてと言ふことはあるが、役所内では君のあさつてと言ふことは名高くあつてる、將來有爲の身を以てソレデハ困るであいか、充分注意して貰はなくてはと言つたら、圖良雄先生へ、つて輕ひ輕薄笑で受けたそうです、楳に釘で一向こたへあしですと

雀「ソレでは課長が氣の毒だネ

雀「デ一昨日の月給日に課長サンが、會計課から自課各員の月給を受取つて來て、自分の前に各員を列べて、他の人には精勤ありしことを賞めて、最後に圖良雄君ツ君の分はあさつて渡すことにすると言ひましたら……」

雀「ホ」

雀「それ丈は是非今日に………て低頭するんです………デハ仕事

の方もあさつておしにするかど入念すれば………例の如くへへへへへですて

春「ハハハハッハ………」

團々珍聞の流義に習つて居らぬに

マルチンルートル（團珍流取る）とはこれ如何に

漣笛の鳴音を吸ふて居らぬに

ブース（ぶー、吸ふ）と言ふが如し

へ 上 ま 下

雀「先生あの突法松と虱辰の擲擲口論は可笑しいですせ

春「二人とも面白ひ男ダナ」

雀「アノ二人は實の兄弟以上の情交ですが、始終擲擲口論ばかりしてますから、一寸外見には敵同士の様に見へるんです

春「あまり中がよう過ぎると子

雀「平生突法松は虱辰にあほあほて言ふ、虱辰は突法にぼけぼけて言ふてますが、此頃は突法があた虱をさ上に下くと言ふんです

春「奇天烈をことを言ふ子

雀「虱があた此は何んでも冷かしてるに違ひない、さ上に下を研究して遣返あくてはど心私かに覘つてるのです、ソレは其筈でサー、さ上に下から以來は虱の方は何時も受太刀になるのです、昨日午後フト北山サンに虱が出會つて、アノ人はドンナことでも知つてる人ですから、さ上に下とはドウ言ことかと問ひたら、精敷教へて呉れましたと

春「フーム判つたかね」

雀「北山サンの言ふには、あれは昔から言ふことだ、へ上へ下へ下
さ下せ下はほどぎすソレ知らぬはさ上に下ありと言ふんだナ
ニいろはでへの上の字はほ、への下の字はど、又への下はどさ
の下はき、せの下はす、だからへ上へ下へ下さ下せ下でほど
ぎすにあるのだ、さの上はあ、にの下はほ、だからさ上に下と
はあほてふことだと、コウ教はつて貰つたのですつて」

春「北山サンは博聞強記だ子」

雀「で昨夜あかた虱は突法に出逢つて、多年の復讐思ひ知れとの意
氣ごみで、イキナリおいへ上まで下て言つたら、突法は一寸まご
つくはかを突込むで、フム君はへ上まで下を知らかいたか、た
からへ上まで下たい、へ上まで下とは君のことだいつてあなた非常
に遣込まれて突法は敗毛化轉でしたと、北山サン流の勘定では

へ上まで下とはぼけと言ふことにありますからナ

春「如何にもそうだ子」

雀「ナニあかた突法松も此前矢張北山サンにこの事を聞ひたのだそ
うで、二人共北山サンにイラはれて居つたのですてハハハハ
春「ハハハハツハ……………」

五男に茶汲みもさせぬに

ゴルチャコーフ（五郎茶ゴホス）とは是如何に

國にも郡にも村にも入用の人なるに

ムラヴヨウ（村不用）と言ふが如し

糞の穴

大翠丸の金留、ある朝はやく馬喰五郎喜の門邊を過り、その家に向ひ聲高く

金「五郎喜家にか、早ひ子」

挨拶しけるに、五郎喜例の道側の雪隠にありて、雪隠より

五「オ、金留がお早よう

金「ハア、君は又糞垂れてるのか、よく雪隠に入てる男だ子

五「エラ相に言ふかい

金「君はホント糞垂た子、早く出て来かい、雪隠の中とは話も出来ないでかい

五「今すぐ出るが此頃は痔の氣でもあるのか、尻の穴は少々痛むから、ツイ雪隠が長くあるんだ

と言ひつゝ、雪隠を出で来りぬ

金「しかし五郎喜、君は今尻の穴と言つたが、尻の穴と言ふものは

あるものかい

五「尻の穴はあるものないもあるかい、糞の出て来る處は尻の穴じやないか、上品に言へば肛門、下品に言へば尻の穴又はけつ穴だ、朝つばらからケツイタイなと言ふかい

金「だから君の言つてゐることは、皆スカタンばかりだと言ふんだ、上品に言へば肛門ソレはよいが、下品の處で真違つてゐるんだい、あれは糞の穴と言ふもんだ

五「馬鹿言へ、尻にある穴だから尻の穴と言へばよいんだ、昔から誰も彼れも皆尻の穴と言つてゐるに、今更糞の穴と言ふ道理があるかい、道理のないこと言ふは、無茶を言ふんだ、君は全体無茶ばかり言つてる男だ子

金「へん君は自分が道理が判らんからソウ思ふか知らんが、ワラ糞は嘗て道理のよいことを言つた覺へないんだ、糞の穴の道理を

教へてやるぞ

五「イツまでも馬鹿放くかい！」

金「オイ五郎喜静にしろい、君はナニか山に行つて兎の出た穴を見
たから、アレは山の穴と言ふか

五「ソレわ兎の穴と言ふ哩

金「君はナニか山で狐の出て来る穴があつたら、山にある穴だから
つてソレは山の穴だと言ふんか

五「ソレは狐の穴と言ふんだ

金「君はナニか山に狸の出て来た穴があつたら、山の穴と言ふのん
か

五「狸の穴と言ふんだ

金「君はナニか田の畦に蛸たかの出て来る穴があつたら、畦にある穴
だから畦の穴だと言ふか

五「馬鹿言へソレは蛸たかの穴だ

金「君はナニか畦に蟹かにの出て来る穴があつたら、畦の穴だと言ふの
んか、

五「誰がソんなこと、ソリヤ蟹の穴だ

金「君はナニか畦に蛇へびの出て来る穴があつたら、蛇の穴と言はかい
で畦の穴と言ふのんか

五「うまあいこと言ふかい、蛇の穴だ

金「君はナニか河に鰻うなぎの出て来る穴があつたら、河にある穴だから
河の穴と言ふのんか

五「知れたこと言ふかい、鰻の穴だ

金「左すれば五郎喜、糞くその出て来る穴は言ふまでもなく、糞の穴で
ないか

五「イカにも！、そうだし！

金五郎喜ドウだい、一昨日来い！ハハハハ、、、
五「わるい奴だナ！ハハハハ、、、」

半鐘の音で狂ふ坊主でもあいに

ジャンジャックルイソー(ジャンジャン狂ふ僧)とは如何に
海嘯の様を詞遣もせぬに

ユーゴー(言ふ、ゴ)と言ふが如し

家は借ものだ

法螺熊の長太ありけり、父法螺熊は定期米にて失敗して死亡しける
後を承け、親もあく兄弟もあく貧しく暮しける男あり、ある日亡父
の友達ある例の馬喰五郎喜を訪ひ

長「五郎喜の叔父サンわたしは今日一寸叔父さんの思案借りに来た
んです

五「オ、乃公の智慧工夫と言つたら、孔明真田も跳足だ、何ありと
も言ふがよい

長「私も叔父サンモ一廿七にかりましたが、貧乏でも人並に世張て
ふものをしたいのですが、四疊半一室のあんを汚い家に住むで
、日雇稼してるんですから、嫌を貰ひたくても誰も来て呉れる
人はあし困まつてますが、叔父サン何とか良い工夫はあるまい
かネ

五「長太われモ一廿七になつたか、ソリヤ嫌欲しがるも無理があい
コウツ……………オ、そうだ長太すこし遠方から貰ふ
がイイな

長「何處でもかまいませんぬ、叔父サン一ツ世話して下さい……………」

五「フム乃公は牛馬の馬喰するばかりじやない、人の馬喰もするんだ、口銭は高直いぞ……コーツ……」

と孔明真田を跳足で逃げさす先生と言ふ、長い名の五郎喜手を拱き
て考へ込みぬ

五「オ、長太よいことはある、乃公は遠方のある持丸から、よい娘
さんを貰つて来て遣る、併し婚禮丈はお前の叔父の天保政の家
を借りてするんだ、われ政公に頼むがイイ

長「叔父さん私しは貧乏な家から貰ふ方がよいのです、交際に困り
ますから、家は政叔父は貸しては呉れますけれど

五「度胸の小さいこと言ふかい、裸でも落す例はあるかい、乃公
に任せて置くがイイ、金の澤山持つてる別嬪を貰つて遣るに、
不足はあるかい」

長「何分よろしく頼みます

その後五郎喜自村より五里計離れたる、馬喰の得意場なる新村と言
ふ處に至り、商内^{あきない}がてらにその村の島太と言ふを訪ひ、

五「時に島太サンか家の縁付先から先達つて戻されて来た娘サンは
ドウしてるのです

島「あれは自家に居ります、あれは私しの三番目の末娘で、可愛い
てからぬものですが、上は皆立派な處へ縁付いて、仕合よく暮
してますに、あれ丈は去られましたして不仕合なもので、毎日此事
を嫌と言つて泣き暮しです

とて目をしばたければ、五郎喜「此處だい」と思へる面持にて

五「お尋ねするは外でもかい、私の甥に長太つて立派な男一匹ある
んだが、此頃家内を貰つて見ようかと言つてますが、都合に依
ればお娘子を御世話申したらと思つて予

島「良縁と思ひあさるから、五郎喜サン一ツ御世話を予、私ども夫

婦助けですから

五「ナニあかた長太てふ奴は中々見込のある奴で、随分甲斐性者です私の口からは異を申分ですが、男前はよし氣前はよし、それに一人息子の上にモ一兩親も亡くあつてゐるんですから舅姑の辛抱はあし、ですから此迄も自村は固より近郷近在から縁談の申し込みは降るほどありまして、月の中に何回この斷り言ふか判らぬ程です、イヤ三千圓持參金付けるとか、五千圓付けるとか、正はイヤから公債にしようか、勸業債券か銀行の株券にしようか

前刻より縁談は耳寄よりと、イツの間にか傍に來り居たる島太の女房、夫と共に目を丸くし

五「五郎喜サン御出であさい、結構をお話しですナ

五「イーエ甥のつまらぬ話でサーハハハハ、ソレにあかた

長太の奴何か考が有るのんか、是まで皆まだく早いて斷つてますが、家内を貰へば安心させる丈のことをしなければならぬと思つてたのでしう、ホント感心を奴です、毎々私にも申しますには叔父サン男てふものは、今日立派な家に居るかと思へば明日は四疊半一室位の家に住み、明後日又御殿の様な家で暮すてふ位の境涯しなくては面白くあいてんです、私も長太お前ならそれは出来るが外のものは真似が出来ぬと言つて遣るんです、此頃何か目途が付いたと見へて、妻を持つと言ふんですが、今彼れ此れと見較べ中でサーハハハハ、

島太涎の流れさうを面持にて

「自家の娘がモ一少し器量ものならばナ

とさぐりを入れるらし、五郎喜はや氣取れるも素知らぬ顔、岩強を真鍮煙管にて一ブク吸ひ付けながら

五「ソレに長太の奴は言ふに、ナンデモ男は境界を廣くせんければ
行かぬで、妻も可成遠方から貰いたい、萬事は叔父サン任すか
ら、三千や五千の目腐金に心を置かず人柄のよいのをてんです
、私はお家の娘サンのことも時々胸に浮むで來るです、婿の年
は廿七、チャキ／＼の男一匹！

島「少し口に憚かるが自家の娘でも……………ナ！家内

妻「五郎喜サンの御世話にられますからホホホ、、、

五郎喜「フム」と態と考へ込み、しばしして中音にて獨言

五「乃公がフムと言へばそれでイイんだ……………イツソ此處の娘にし
ようかフム……………」

五郎喜遽かに決心の色を示し

五「イヤ此家の娘サン來て貰ふことにしよう、乃公はそう決めた
夫婦の顔に喜びの波、漂ふらし

五「イヤいけかい／＼此家の娘は二度目だ、コリヤ忘れて居た哩！
とて横目でそと夫婦の顔を見るに、不安の雲立ち上れり

島「不仕合ものはこれで困る……………フム……………」

妻「フム……………難義ですナ！……………ホント……………」

五「萬事は乃公次第じやが……………フム工夫はつかぬナ！、惜
ひ娘じやが……………」

三人共非常に深く考へ込む様子あり、五郎喜丈は心に舌を出す、暫
くして

島「五郎喜さんあな次第だから、何かよい工夫はあるまいか、エ
エ……………その一度目とも二度目とも言はない様を振りにでもし
て、お互に遠方同志だからチツトのことは……………」

五郎喜心に此盡々々と思ひながらも苦ひ顔

五「イケナイ／＼乃公がドウにもなるが、聞合せと言ふものはある

だらドウにもあるし、此が村中へ知れると大した人気にあるんだ、長太サンの花嫁サン媒人への土産三百圓だつて咽を鳴らすからナ、すると競争してた奴等もギャフンと参るからナ、島「オ、それは良い工夫だ、それに限る、して日取は何時にすればよろしいかナ」

五「コート……善は急げだ、明後日長太と娘サンと見合させて其翌々日島太サン婚禮する家を見あさい又其翌々日、興入れすることにしよう、邪魔が入ると困るからナ」

とて萬事打合せ自村に歸り長太に向ひ

五「オイ長太イイ嫌は出来たぞ、別嬪で持参金五百圓、われに過ぎたら、乃公の骨折で出来てるんだから、持参金半分は乃公に口銭としてよこさなくては行かぬぞ、嫁は手土産として三百圓乃公に呉れることの段取にあてるんだか、これはホンの景氣付

けで中は空つぼだから、お前は馬喰の口銭を出さなくてはいけないんだ、時に天保政の家は借りたかい

長「政叔父に話したら、道具も皆揃つとるから婚禮の日文貸して遣ると言つてました

五「それもよしよし上上吉だ、明後日見合だから今から男前を作つときナ」

長「叔父サンの遣り方はスバラシイで、恐い様を心地がする！」

五「膽ツ玉の小さいこと言ひあさんナ、ドロ膽を肥やしときナ」

かくて見合もすみ、島太婿長太の家の參觀に來りければ、五郎喜伴ひ天保政の家を一覽せしめ

五「コレだああなたの娘御の婚禮する家は

比較的完備しあれば、島太も安心しぬ、舉式の前日五郎喜島太を訪ひ

五「愈明日にかりましたナ、此方は萬事都合よく運びますが、あなたの方も宜ろしいでしょうな、モーモー濟むまでは氣がかりであらひです」

島「誠に御手数かけて濟みませぬ、御恩は行々返したいと思つてます」

五「ハハハツハ何の此しきのこと、併し私は萬事悪い方を能く見て置いて、あとで思惑違のあい様入念することを大事に思つてる男ですが、婿は今日立派な家に住むで明日は四疊半一室位の汚い家とかはつても叶はぬ、明後日御殿の様を家に住みたいと思つてる位の奴ですから、此事はあなたに御心得違のあい様によく考へて戴ひたいです、念の爲めですから、

島「婿の了見は見上げたものです、ナニ明日あの家で婚禮して翌日乞食小屋に替りましても、苦ひあいです私は婿に惚れました」

五「ソウ婿の爲めに因果を据へて下さると、長太の奴も此上なく喜びます、ナニあなた長太が言ひますには、財産杯言ふものはホンの假のもので、あの御覽をつた家でも婿の遣り方に依つては借つたようなものだて、ソレハ〜小氣味のよい奴ですが、他の親類は長太の心を知つてますで、心持のよい奴だとほめてますが、あなたは初めてだで、家さへ借物の様だと言ふと後で後悔なさる様のこととはあつはど、ホンノ馬鹿念にナ一寸……………コウ申上げて置かなくては五郎喜が、虫は巢に入りませぬでナハハハハツハ、ハ、ハ、ハ、

島「イヤ御念結搦、此上は運賦天賦でサー」
五「イヤ御見上げ申します」

横を向き一寸舌を出せし様子よろしく

五「明日は可成御早くチ……………御待ち申します」

翌日萬事準備行き届き、夕刻與入も済み、五郎喜三百圓の手土産を
 ホタホタ顔にて懐に入れ、式萬端形の如くし、新郎新婦はお前百迄
 わしや九十九までの契を結び、双方の親戚は殆んど徹宵の宴を張り
 、又翌日とありぬ、五郎喜長太に向ひ

五「長太借り家には長く居ることも出来まいから、自家へ歸るであ
 いか、嬬も連れて歸れ

長「直ぐ歸家ります

新婦に向ひ

長「此家は天保政てふ叔父の家だから、自家へ歸るであいか

島太聞き附け來り

島「五郎喜サン、何と言ふんです

五郎喜平然

五「此家は借りものだ、婿の本宅はあちらにあるんだ、四疊半一室

の家だ

島太仰天しながらも、皆に従ひ行き見るに果して汚きたき豚小屋あり

島「五郎喜サン此では思惑は違ふ!

五「だから思惑の違はぬ様、何遍も入念したであいですか、翌日乞
 食小屋へ入る様を婿に質以て惚れたと言つたであいですか、此
 でも長太は心懸けのよい者で、又明日にでも御殿の様な立派な
 家に、入はいれるならば入はいりたいと思つてますハハハハ、ハハハ、

島太口あんぐり

お爺おぢサンに先ま上げて呉れとも言はぬに

マツヂニ―(マツ爺に)とは是れ如何に

ゑらがる威張る爺サンであいに

ガルバルヂ―(がる張る爺)と言ふが如し

是はけしからん

初雪の降りける朝、雀忠太又春篋老許訪ひ

雀「先生何も言へぬ初雪ですな」

春「雪見にころぶところまでつて、古人はうまいことを言つたもの
だナ、其氣になるは妙だナ」

雀「イヤも古人には實以て降参ですナ………時に先生一昨日又私
しは大變を失敗を出來しました

春「よくしくじる人だナ、ドウしたと言ふのんかい

雀「ナニあち私しは一昨日親戚の縁談のことで、峰町の鹿爪さん
の家に行つたんですが、御承知の鹿爪サンは至つて眞面目を人
であり、實に紳士の標本、近郷切つての名望家、それに行儀作

法の嚴格を人ですから、ナンボざつくざらりの忠太でも、相手
によつては剥き出しにも參らず、節米の着物に七子五ツ紋の羽
織の着流してふ、めかして訪問したのですが：

春「フムフム

雀「立關で音をひましたら、取次が出て來たで名刺を出しました、
一旦内に入つた取次はまた出て來て、こちらへと案内しますで
跟いて行きましたら、奥座敷に通しますが、彼家の奥座敷は
濫ひ構造で立派なものでサ、床の正面に郡内座蒲團の上に静
に座つたときは、居は志を易へると申すものか、此雀君も數等
品位が上つた心地がしましたせ

春「ソレはソウだろう

雀「床の掛物は光琳の早梅、絹本に地味を綴子表装、置物は散らし
青貝の卓に伊萬里柿右衛門の犬ころの焼物もですが、調子が

高びですナ、楣間の額は伊藤蘭岫の行書、随見随聞處の五字

ですが、先生儒者の書は又格別の品格がありますナ、
春「儒者中でも蘭岫は伊藤の首尾藏の一人で、紀伊の藩儒で人格は
非常に高かつたらな

雀「コウ裝飾に感服してらうち、茶や菓子運びで呉れました、菓
子器は梨子地に軽く艸花の巻繪を施した高卓です、ソレへ湖月
堂の窓の月を行儀よく山形に積み上げてあるのです

春「行き届いたものだし

雀「欄間の彫刻は刻手は誰か知りませぬが、下繪は渡邊華山と言つ
てるそうですが、淡泊な清見富士、引き付けらる心持は致しま
す、襖の畫は狩野派の仙人山水、山樂あたりかその高弟位かな
いと當てすつば鑑定して居ますうち、鹿爪の裾のお兒でしやう
七八ッ位の坊ンチが座敷へ入つて来て「叔父サン今日は」つて

しとやかにお辭儀して、私と向ひ相にチント坐つて手を膝の上
へチンと置いてるじやありませんか

春「フムフム

雀「私も餘り可愛く思つたもんですから、坊ンチ賢ひことネと言つ
て菓子器の窓の月を一ツ取つて、坊ンチお菓子を上げよつて遣
りましたら、大きにつて又丁寧にお辭儀して、彼方へ行つてし
まつたです

春「感心だし

雀「ソレから私は今日の話口は、コウ言ふ風に言ふかア一言ふ風
に言うか、話と言ふものは先方のぐわいで、得てして後れを取
つて言ひ洩して歸り、跡でコウも言へばよかつた、ア、も言へ
ばよかつたと後悔するものですから、ソレナ事のあい様と思案
を廻らしてらうち、又今の坊ンチが入つて来て「叔父今日は」

つて前の如く又チンと坐つてるじやありませんか

春「フムフム

雀「私も此度は軽く『へ今日は』つて一寸頭を下けて尙も考へ込むで居ますと、坊ンチ少時坐つて居ましたが、ツト立つて自分で窓の月を一ツ取つて、彼方へ行つたです

春「罪がかい子

雀「私もハハア坊ンチは菓子欲しくつて、挨拶に来るのだナ、ア一悪いことをした、自分で取つて遣ればよかつたと思つて、しかしソレはソレとして主人公は一体遅い、着物でも着替てるのか但し外に來人でもあるのかと思つてるうち、又坊ンチが入つて來て、此度は挨拶もしないで、イキナリ菓子を一ツ攫んでタタタと彼方へ走つて行くのです

春「ホー

雀「今のではや三ツ目だナ、一時にアンナ大き菓子三ツとはチトひどひを、ソレにしても此窓の月は一ツ三錢イヤ四錢はするだろうと評價してるうち、又タタタと跳び込むで來て、一ツ取つてタタタ走つて行く……………」

春「困る子、ホント

雀「食ふ間も何もあいうち、又タタタ一ツ攫むでタタタ、又タタタ一ツ攫むでタタタ、又タタタ一ツ攫むでタタタ、又タタタ一ツ攫むでタタタ、

春「無茶だ子

雀「又タタタ一ツ握つてタタタ、先生私ハ困りましたナ、行儀よく積み上げてある菓子だから、凡そ減つた數は知れますし、雀と言ふ男は下品を奴だ、主人の居らぬ中に大變菓子を荒らしてあると、思はれるは誠に残念であり、左りどてお宅の坊ンチはこれを皆取つたのだとの辯明も出來ず、胸へ雖で穴もまれ

り子は舞舞を中心にして遠く大なる輪郭を造る、音頭取臺上に立ち踊子おどりこの手拍子足拍子を見廻はしつゝ、聲張り上げて唄へば、はやし方各々三味線胡弓太鼓尺八等にて之に和し、踊り子音頭にて手拍子足拍子をそろへ、音頭の切れ目に口ばやし唄ひつゝ、輪郭を轉じ廻り行くあり、大抵四五日は夜毎村中の老若男女、總出の有様にて人氣爲めに沸騰するあり

若者等はこの音頭唄にて喝采を博するを、唯一の樂とし夏至れば盃盃盆會を指折り數へて待つあり、而して盆前三十日ばかりより所々相會して夜毎音頭唄の練習を爲す、初心のものは名人江戸松に就きて、教へを乞ふ、それ故年々近郷近在より弟子入りするもの多く、此季節には松公目を廻はすあり

ある夏東山村より五六人組の若者、江戸松に弟子入しけるはありけり、他は普通に唄を覺へ行きけるに、中に一人節の了得に苦むもの

あり、江戸松

虎は千里の藪さへ越すに、障子一重はまゝからぬ

と俗曲に節付け

松『とらーアアアアはーアアアツ、せんりーいーのオオオ、やぶウーウウさーアアへエエエ、こすーウウーにイイイ

聲調の美妙引き付けらるゝ思ひあし、餘情の婉言語に絶へ、東坡の餘音嫋々不絶縷縷、舞幽壑之潜蛟、泣孤舟之嫠婦てふ奴あり、弟子之に真似むとて

弟『とらアア

松『違ふく

弟『とらーいー

松『違うくく

弟『とらーいー

松「違うくくく」

弟子首を彼方此方捻じまわし

弟「とーら

松「違うくくく」

弟「とーらー

松「違ふくくく………コウだ、とらーアアアはーアアツア

ツ………

弟「とフらー

松「違うくくく」

弟「とーフらー

松「違うくくく」

弟「とホらー

松「違うくくく」

弟子鼻聲になりもし、キムバキ氣張もし、目を睥め廻しもし

弟「とオーらフ

松「違ふくくく」

弟「とンらー

松「違うくくく」

弟「とホンらー

松「違ふくくく………コウだ、とらーアアアはーア

ーツアツ………

弟子腮突出し首を振り

弟「とオランヤー

松「違うくくく」

弟「とーモらー

松「違ふくくく」

雀「先生今日は、又参りました」

春「ヤーお出でささい」

雀「先生彌助のボテてふ奴は、ケツタイを奴ですせ」

春「ボテとは奇体な名だナ」

雀「ナニあな奴は以前は、よく太つて丸ひ良してますで布袋てう綽名を付けられてたのですが、奴サン遊藝が好きで毎日あの大い腹をボテボテボテと叩ひて、三絃の拍子どりの積で口でチンツンチンツンと口癖に言つてますで、皆がアツヤ布袋じが名を替へてボテチンツンにして遣ろつて、それを尙省略して到底ボテとあつてしまつたんです」

春「面白いナ」

雀「處が先生の奴は仕方のない、キヨロツ八ですせ、昨年から村の若者七八人を教唆て村芝居を組立て稽古しましたんですが」

春「ソウだとす、中々皆がよく出来ると言ふことじやないか」

雀「エエ私も二三度見ましたが、一寸下下しの壯士芝居ぐらいは出来ますす、ナニあなた此村や隣り村位、打ち廻つて樂みにしてると宜ろしいのですが、ボテの奴又おだて、モ一此位出来れば他國へ持つて行て打てる、金儲しようじやないかつて、あなた止せばいいに、ボテの座頭で國越に紀州に行つたんです」

春「素晴らしい元氣だす」

雀「處があな行く先々で、皆下手やつて面喰らつてるのですつて、湯淺で五日の積りでやつた處が、初日にドノ役者が出ても、見物は皆大根々々つて、冷かしてばかり碌々見もしませんのですて」

春「困つたす、折角他國へ踏み出したに」

「ソレヲ一日限で逃げて御坊へ行きましたと、御坊でも大根々々」

、田邊へ行ききました同じく大根大根！、串本同様大根大根！、
フム新宮大根大根！、木ノ本フム大根大根！

春「流石の座頭ボテ君も屏行したろう

雀「ナニあまた屏行する様を奴ですか、座中の甲乙に國元から金取
り寄せさすて、自分は一文出さずに、面白ろ可笑しく茶り廻つ
てるんでサ、達磨竹杯は三十日経たぬ中、三回に金の七十圓
も送りましたと

春「並大抵じやあい子

雀「座中には歸家たいと言ふものはあつたさうですが、ボテ此儘で
は歸國れんつてトド志州に渡りましたつて

春「高歩きしよるナ

雀「ケド志摩の鳥羽では流石は座頭丈あつて、大變を大當りを取り
ましたと、初日の出し物は義經千本櫻、最初は矢張大根大根！

、狐の忠信の場にありまして、ボテの持役は早見の藤太、木舞
臺では静御前と狐忠信が仕草よろしくの、仕舞口にボテの藤太
は四五人の手下を引連れ登場、藤「待て！、臣「子イ、藤「待て
！、臣「子イ、藤「待て！待て！待て！、臣「子イ子イ子イ、
藤「待て待て家臣どもヤ、と言つた處で陰板はクワターイ
とあつて同時に、ボテは大きくめいを切つたのです

雀「ホ

雀「處が見物は一同ヤ、大根大根！、亂呼するにピクともせず、ボ
テ君矢張藤太の聲色で「大根にはまだ行かぬ、三月菜の根で御
座る」と強い語氣で言ひ切つて、又大きくめいを一ツ切ると、
はやし方も氣を利かせてクワターイと大きく和せて陰板を打ち
ましたら見物一同大當！大當！つて喝采しましたと

春「ハハハハツハ